

2023年9月1日

みずほディーラーズアイ (2023年9月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 140.00 ~ 145.00

金融市場部 グローバルFIチーム 山崎 浩幸

■ 先月の為替相場

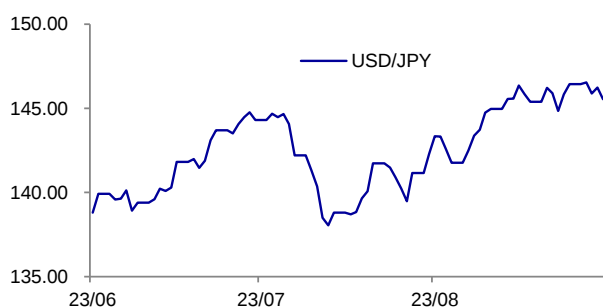
8月のドル円は、7月末にBOJでYCC政策に微修正を行うことが決定されたものの、金利上昇を抑制するスタンスから142円台前半へ上昇する流れでスタート。その流れのまま143円を挟んだ値動きに移行した。週末に発表された米7月雇用統計の結果は強弱まちまちであったがドル売りで反応し142円を割り込んだ。翌週7日には、米金利の底堅さや本邦株式の上昇を背景に再び上昇すると、ドル円は142円台を回復、その後も上昇を続け142円台半ばへ到達。翌8日には本邦や中国での予想比悪い経済指標が発表されると円売り、ドル買いが進み、一気に143円台を上抜けると143円台での推移が続いた。その後もじりじりと上昇が続き10日には一時144円台に到達。この日に発表された米7月CPIが予想を下回り、一旦ドル売りで反応すると143円台前半まで急落するも、その後は米株式先物が上昇する流れにリスクオンの円売りから急速に切り返し、そのまま144円台後半まで上昇。連休明けの翌14日には、その流れから145円台を突破すると145円台半ばに到達した。16日には人民元が安値圏で推移する中、ドル円は底堅く推移。その後、米長期金利が上昇を続けるとドル円も上昇し、一時146円台半ばに到達した。しかしその水準では本邦の介入警戒感も根強く、また人民元で中国当局による中国国有銀行への為替市場への介入強化といった報道もあり、円買い圧力が強まると、再び146円台を割り込んだ。翌18日もその流れで145円付近まで値を下げた。翌週21日には、中国の利下げが発表されドル高が進むとドル円も再び上昇。海外時間にかけて146円台を再び回復するも、そこでは為替介入警戒感から再び下落に転じると、上昇が続いていた米金利も上昇一服となる中で、そのまま145円も割り込み144円台後半まで下落した。翌日にかけて同水準で推移するがその水準では切り返しされて145円台を回復した。そのまま海外時間にかけて上昇し翌25日には再び146円台を回復した。ジャクソンホールでのパウエルFRB議長の講演後に、再び上げ幅を拡大し翌28日にかけて146円台半ばへ値を押し上げた。29日には欧州時間にはいって米金利上昇を受けて上昇し147円台を上抜けし147.37円まで上昇し年初来高値を更新したが、米7月JOLT求人数が予想を下回ったことで巻き戻され、翌日にかけて146円台を割り込んだ。その後は月末にかけて146円を挟んで一進一退の値動きが続いている。

■ 今月の見通し

ドル円は上昇方向を予想する。昨月は人民元相場の変動の影響もあったが、近時のドル円は、米金利の動向に振られているものと考えている。8月のジャクソンホール経済シンポジウムでのパウエル議長の発言は、解釈はいろいろであったかと思うものの、マーケットはタカ派的にとらえたことから、年内の追加利上げを想起される内容であったと評価する。一方、植田日銀総裁による本邦インフレ率に関するコメントからも、日銀に対する金融政策修正期待は後退していると考えられる。よって、両中銀の金融政策の差異は明白であり、日米金利差は拡大する方向と予測する。金利差主導でのドル円上昇が継続するだろう。加えて、中国の不動産開発大手をめぐる債務不履行懸念を抱える中国は、引続き強気にはなれず引続き人民元は売り圧力にさらされることから、ドルは相対的に強くなり、クロスしてドル円の上昇圧力の一因となるだろう。しかしながら、欧州圏においてはインフレ率が引続き注目され、政策金利を引き上げ続けてきたECBの動向には注目したい。インフレ率が上昇を続ける中では、経済が悪化したとしても、連続性の観点から引続き政策金利引き上げに動くものであると予想され、これにより、ユーロ買いの代償としてドルに下落圧力がかかると考える。しかしながら、ドル円の上昇局面では節目節目で介入警戒感の高まりも取りざたされているものの、2023年は年初から考えれば、上昇を続けてきており、昨年の高値水準に近づいている現在のドル円の位置からすれば、それを考えずにはいられないことから、150円に接近する局面では上値が重くなる局面が何度となく見られるのではないかと考えている。

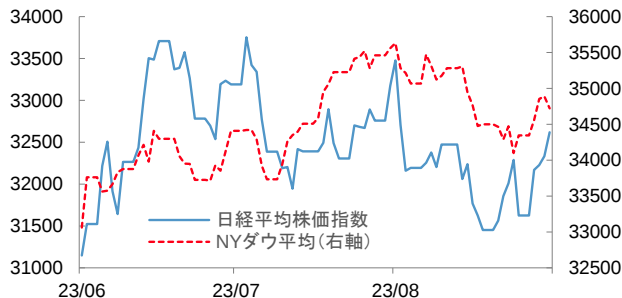
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	ISM製造業景況指数	7月	47.5	46.3	47.7
8/3	ISM非製造業景況指数	7月	53.1	52.7	53.9
8/4	非農業部門雇用者数変化	7月	200K	187K	209K
8/4	失業率	7月	3.6%	3.5%	3.6%
8/10	CPI	7月	0.2%	0.2%	0.2%
8/15	小売売上高	7月	0.4%	0.7%	0.2%
8/29	JOLT求人	7月	9500K	8827K	9582K
8/30	GDP (年率/前期比)	2Q	2.4%	2.1%	2.4%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	12名	149.00 ～ 143.50	ベア	3名	148.00 ～ 140.00	※ レンジは中心値					
河合	ブル	148.00 ～ 144.00	ドル円は、月下旬の日米政策イベントを控え、月前半は経済指標を眺めながら神経質な展開となるか。イベント通過後は日米金融政策スタンスの違いからじり高の展開へ回帰も、介入警戒感から上値も限定的と予想。				松永	ブル	147.00 ～ 143.50	足許で米国の景況感の悪化がみられるものの、タイトな労働市場と高いインフレ水準を踏まえれば、FRBは引き続き引き締めスタンスを継続しよう。引き続き底堅いドルの推移を予想する。	
川端	ブル	150.00 ～ 145.00	前回の日銀の政策変更以降も基調としての円安が続いており、本邦要因での円買いは期待できない。ドル円は昨年来の最高値圏で推移していることもあり、当局の牽制を囁す局面も想定されるが、トレンドを転換させるには材料に乏しい。				田川	ブル	150.00 ～ 145.00	本邦要因ではYCC実質解除や田村審議委員のマイナス金利解除示唆発言などもあったが、USD/JPYの上昇トレンドを変えるには至らず。米利下げの前倒しが織り込まれるようなシナリオも見当たらず、9月も高値圏での推移を想定。	
加藤	ベア	147.00 ～ 140.00	日銀・政府の共同声明文見直しの議論が噴出するほど円安による物価上昇圧力は強い。処理水放出の影響でインバウンドがそれほど期待できなくなっている状況で、足許の円安に対する牽制要請が政圧力として入るかも。				上遠野	ブル	150.50 ～ 143.50	米国個人消費の底堅さや雇用指標の堅調さを背景に米ドルの強含み地合いは変わらず。加えて9月FOMCにかけて中立金利を根拠とした議論の再燃も予測され11月会合における追加利上げ材料を積み上げるフェーズ。	
山崎	ブル	152.00 ～ 142.00	ドル円は上昇方向予想する。米金利は年末までの値上げを織り込み、中国の経済情勢や、不動産大手企業の流動性危機の状況、本邦の金融政策金利の変更期待の減退等から、上昇圧力継続を予想。				小林	ベア	148.00 ～ 140.00	日米間の金融政策の方向感の違いから引き続き円が弱い展開が継続と想定。一方で、米雇用関連指標の軟調な結果が続いており、9月のFRBでの利上げ見送りを想定し、9月のドル円は一時的に下方向に調整されると予想。	
伊藤	ベア	148.00 ～ 142.00	ドル円は徐々に上値の重さを意識する展開か。米金利の上昇余地は限定的で、一方的なドル円上昇は見込みづらい。ただ、日銀のスタンスにも変化がなく、円売り地合いは継続で下値は堅い。結局、145円を中心としたレンジ取引が続くそう。				逸見	ブル	148.00 ～ 143.00	米利上げの停止や本邦当局の介入警戒感、7月以降積みあがったドルロングのポジションを勘案すればドル円はダウンサイドリスクに警戒したいが、日銀に動きがない中、円を買い進める理由もなく、結局は底堅い推移を想定。	
尾身	ブル	149.00 ～ 143.00	今月も米国の高い政策金利の維持と、日銀の金融緩和と政策維持によりドル/円はドル高円安傾向が維持されると予想。但し、米国指標の悪化が見られると、ドル売りが強まる局面もあるか。				鈴木	ブル	148.50 ～ 143.50	介入への警戒感は強いものの、それ以外に円を買う材料は見当たらない。雇用やインフレが極端に弱まるなどインパクトのある材料、もしくはFOMCのスタンスに大きな変更がない限り、ドル円は底堅いが継続か。	
山口	ブル	149.00 ～ 144.00	足許米労働市場の落ち着いたことが確認され始めているが、インフレは依然として高値圏にあり、Fedは引き締めスタンスを維持すると予想する。利上げは先送りとなった場合でも日米の金融政策の違いからドル円は底堅く推移すると予想する。				大熊	ブル	150.00 ～ 143.00	米国の労働市場は緩み始めていると見られるものの、FRBは未だタカ派姿勢を維持しており、米長期金利は高水準、株式市場も堅調で米経済の底堅さが伺える。年内利上げ観測が残存していることもあり、底堅い推移を予想。	
							西	ブル	149.00 ～ 144.00	米政策金利の利上げ余地は限られているものの、利下げへの転換までは時間がある。政府・日銀が介入へのトーンは上がっており、円が売られやすい時間帯は続くだろう。節目の150円を目指しつつ、じり高を予想する。	

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0700 ~ 1.1200
EUR/JPY 156.00 ~ 162.00

金融市場部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

■ 先月の為替相場

先月のユーロ/ドルは下落。1日、軟調な欧州株が重石となる中、1.09台後半でじり安推移。2日は米大手格付機関による米国債の格付け引き下げを受けて、ドル売りが強まる中で1.10台を回復も、堅調な米経済指標を受けた米金利上昇を背景に1.09台前半へ反落。3日、ユーロ圏6月生産者物価指数の鈍化が材料視され、独金利低下に合わせ1.0913に下落。4日、米7月雇用統計発表後、ドル売り優勢の展開となると、1.01台まで上昇。7日、米金利上昇や独6月鉱工業生産の弱い結果が重しとなり1.09台半ばに下落するも、米金利が低下に転じたことを受けて反発。8日、イタリア政府が銀行の超過利潤へ課税する方針を示したことを受け、独金利が低下したこと、1.0930まで下落。9日、イタリア政府から課税規模を縮小する方針を示したことを受け、1.09台後半へ反発。10日に1.10台を回復し、米7月CPIの結果もあり1.1065までじり高推移。しかし、米株・米金利が反転するとドルが大きく買い戻されるされ、ユーロ/ドルは急反落し1.10台割れ。翌11日には、欧州株の下落や米7月PPIの市場予想を上振れる結果にドル買いが強まり、ユーロ/ドルは1.0943まで下落し、1.09台半ばを推移。14日、特段目立った材料ない中、米国時間にかけて米長期金利が9か月ぶりの高水準をつけると、一時1.08台後半まで下落した。15日、中国のサプライズ利下げを受けリスクオフ地合いとなると一旦1.0901まで下落。16日、1.09台前半を中心に小幅な値動きとなったが、米国時間に公表された7月FOMC議事要旨が改めてタカ派色の強い内容が確認されたことからドル高が進行し、ユーロ/ドルは再度1.09を割り込んだ。17日、ドルの底堅さを受け軟調地合いが続き、1.0857まで下落。18日はユーロ/円が下落する動きに連れられてユーロ/ドルも上値重く推移。NY時間に米金利が上昇すると1.0845をつけた。21日、欧州株の堅調推移を横目に、一時1.09台に乗せたが、翌22日、独金利低下に合わせ1.08台半ばに反落。23日、ユーロ圏8月製造業/非製造業PMI(速報)の弱い結果を受け1.0802へ下落。24日も引き続き1.08台前半を推移したが、25日、独長期金利が上昇する展開が下値を支えると1.08台付近まで上昇。28日はロンドン休場の中、動意乏しい値動きとなったが、29日、米経済指標が弱かったことを受けドル売りが波及しユーロ/ドルは押し上げられ、30日に1.09台にのせ1.0945まで上値を伸ばした。31日は戻り売りに押されるも1.09付近を推移した。

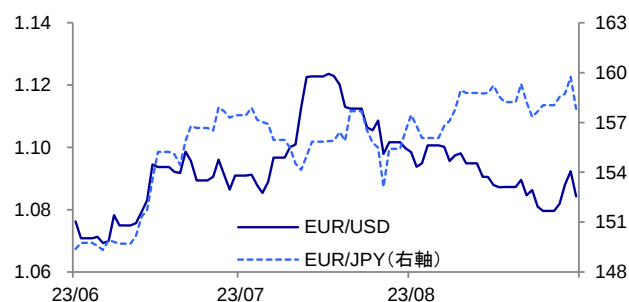
■ 今月の見通し

9月のユーロは小確りとした推移を予想。欧州はこれまで対米国対比、タカ派な金融政策が継続するとの思惑から対ドルで底堅い動きを続けてきたが、7月につけた1.1276を高値にその後は下落トレンド入り。欧州圏の経済指標の悪化もさることながら、7月ECBの声明文にて利上げ局面の終了を想起させるような修正がなされ、欧州経済の先行き不透明感とともに金利先高観の剥落が大きく影響した。8月も欧州圏の経済の弱さが意識され、一方でFRBのタカ派姿勢が改めて確認されたことで、ユーロは下値を模索する展開となったが、ジャクソンホール会合にてラガルド総裁が利上げ継続スタンスを示唆したことや、米利上げ織り込みが後退したことでユーロは一旦、戻りを試す展開となっている。

今月は14日にECB政策理事会を控える。HICPは総合こそ軟化しているものの、コアベースでは高止まりしており、加えて労働環境の底堅さを踏まえれば、ハト派傾斜は困難であろう。先んじてジャクソンホールでラガルドECB総裁からそうした期待への牽制が行われたと考えており、ユーロは今後の政策スタンスの差を意識した買いが下支えとなるであろう。一方で今後もドイツを筆頭に経済指標の冴えない結果が続けば、中国経済の景気先行き懸念も燃る中、欧州圏は域内外ともに不透明感が強く、利上げが一旦停止となるシナリオもあり得る。これはユーロの下押し要因ではあるが、欧州経済の停滞はエネルギー需給の緩みを生み、貿易収支改善に資するため、需給環境ではユーロに追い風が吹くことになる。そのため、7月から続いたような一方的にユーロが下落する展開は想定しておらず、下値は限定的と考える。

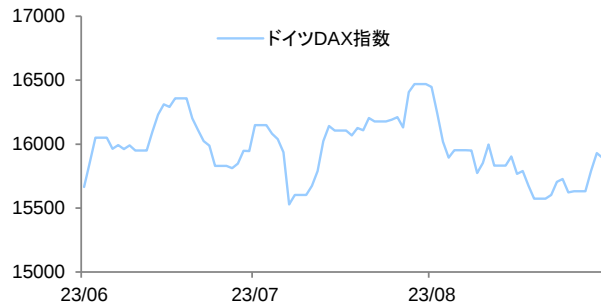
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	ユーロ圏製造業PMI	7月	42.7	42.7	43.4
8/3	ユーロ圏コンポジットPMI	7月	48.9	48.6	49.9
8/3	ユーロ圏サービス業PMI	7月	51.1	50.9	52.0
8/16	GDP (季調済/前期比)	2Q	0.3%	0.3%	0.3%
8/16	GDP (季調済/前年比)	2Q	0.6%	0.6%	0.6%
8/18	ユーロ圏CPI(前年比)	7月	5.3%	5.3%	5.3%
8/18	ユーロ圏CPI(前月比)	7月	-0.1%	-0.1%	-0.1%
8/18	ユーロ圏コアCPI(前年比)	7月	5.5%	5.5%	5.5%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	5名	1.1200 ～ 1.0800	ベア	10名	1.1100 ～ 1.0700	※ レンジは中心値
河合	ベア	1.1500 ～ 1.0650	ユーロ圏の景況感悪化が鮮明になる中、8月に続きユーロドルは軟調な展開を予想。14日に開催されるECB理事会は景気に配慮する形で政策金利を据え置きを個人的に予想しており、月後半はユーロドル下落に拍車がかかるか。			
川端	ブル	1.1100 ～ 1.0800	ユーロ・ドルは引き続き域内のインフレ指標や米国の金融政策見通しに受動的な展開が継続とみる。足元、米指標の鈍化やジャクソンホール前後のドル高い警戒感からの反動で強含んでいるが1.10台を上限とするレンジ相場の継続を予想。			
加藤	ブル	1.1200 ～ 1.0850	若干ドイツの実体経済に関する懸念が浮上しているが、実体経済の不調は燃料を主体とした輸入価格の抑制につながり、必ずしもユーロ/ドル相場の下げ要因とはならない可能性がある。依然堅調な動きを想定する。			
山崎	ベア	1.0900 ～ 1.0750	EURはレンジ相場ながらやや軟調方向を予想する。EURはインフレ率低下鈍化等、引続きECBによる政策金利引き上げ圧力が相応あることから、強いドルに対して底堅く推移するものと予想。			
伊藤	ベア	1.1200 ～ 1.0700	EU圏インフレは低下傾向であるが、依然として高止まりが懸念されている。現状、次回理事会での利上げの可能性は半々だが、景気減速懸念も高まっており上値は重そう。EURロングポジションも積み上がりも上値を押さえる要因か。			
尾身	ブル	1.1300 ～ 1.0800	ECBの利上げ継続により底堅い推移が継続すると考えている。但し、米国も高い政策金利を維持しているため、もみ合いが継続し値幅は限定的か。			
山口	ブル	1.1200 ～ 1.0800	足許米国の経済指標が弱含んでおり、利上げの織込みが後退。一方で、欧州はインフレの高止まりを受けECBがインフレ抑制スタンスを維持しており、今後も利上げを断続的に継続する必要があると見ている。ユーロ高圧力が高まると予想。			
松永	ベア	1.0950 ～ 1.0700	依然として欧州のコアインフレは高止まりが継続するが、欧州の景況感の悪化など景気後退への警戒が強まる中、ECBのタカ派スタンスがそのままユーロ高に繋がるまい。ユーロは上値が重い地合いが継続しよう。			
田川	ベア	1.0990 ～ 1.0740	ユーロ圏の物価は低下トレンド、PMIも8月はサービス業が節目50を割り込むなど、米-欧の景況感にコントラストがついている状況でユーロは売られやすい展開を想定している。			
上遠野	ベア	1.1050 ～ 1.0700	コアベースインフレ指標の鈍化や中国景気減速の煽りを受けた景気下振れ懸念等から追加利上げ余地は縮小。強含みと米ドル対比較調な動きが続くものと予想。			
小林	ベア	1.1100 ～ 1.0600	欧州圏の景気低迷が目立っており、マーケットでは9月のECBでの利上げ停止との見方が強まっている。ECBの利上げ停止となった場合、もう一段のEUR下げ相場を想定しておきたい。			
逸見	ブル	1.1200 ～ 1.0700	ECBの利上げ停止リスクも漂うが、その場合は需給面がユーロの支えに。米利上げ期待が後退する一方で、欧州は米国対比タカ派と捉えられ易い状況下、ユーロの底堅い推移を予想。			
鈴木	ベア	1.1100 ～ 1.0700	ドイツを筆頭にユーロ圏の景気後退懸念が強い。ECBの利上げ機運も徐々に低下してきており、経済が堅調な米国との格差は大きく、ユーロは軟調な推移になることを予想する。			
大熊	ベア	1.1100 ～ 1.0700	ユーロ圏内の高インフレは継続している一方で、経済指標は軟調なものが目立ち、ECBによる利上げ観測は以前よりは後退している。特に独経済の先行き不透明感が高まっていることは重しとなり、次第に上値重くなると予想。			
西	ベア	1.1100 ～ 1.0700	ユーロ圏の物価は高止まりしており、米国と比較して引き締めが必要な状況。ただ、ユーロ圏の景気減速が懸念されており、上値は重いか。積みあがったユーロロングポジションの調整にも警戒が必要だろう。			

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2400 ~ 1.2800
GBP/JPY 182.00 ~ 189.00

欧州資金部 中島 將行

■ 先月の為替相場

8月の英ポンド相場は対ドルでじり安の展開となった。とりわけ8月23日に発表されたユーロ圏及び英国の8月サービス業PMI(速報)が大幅な落ち込みとなったことで下落が加速し、8月25日には1.2548まで下落。7月末の1.2835からの下落率は▲2.3%に達した。その後は米金利低下もあり、8月30日時点で1.26台まで持ち直している。ポンドは他のG10通貨に対しては底堅く、対円では7月末の182.61円から8月30日時点で185円台に上昇している。1週目のポンド相場は対ドルで横ばい。BOEは3日、政策金利を5.00%から5.25%に引き上げた。利上げは14会合連続で、2008年4月以来、15年ぶりの高水準となった。前回6月会合では利上げ幅を+0.25%ポイントから+0.50%ポイントに拡大していたが、その後発表された英6月消費者物価指数(CPI、前年比)が1年3か月ぶりに+8%を下回ったことを受け、利上げ幅を従来のペースに戻している。もっとも、BOEはインフレが持続すれば金利はさらに上昇する可能性があるというフォワードガイダンスは維持した。2週目のポンド相場は米7月CPIの前夜で上下に動く展開となった。3週目のポンド相場は、中国景気を巡る懸念や米債利回りの上昇を背景にグローバルにドル高が進む中で逆行高となった。15日に発表された週平均賃金(賞与除く)は4~6月期に前年同期比で+7.8%上昇したことを受け、BOEに対する追加利上げ期待が高まった。雇用者数は4~6月期に前期比で▲6.6万人減少したほか、6月分の失業率は4.2%と5月の4.0%から上昇したことを踏まえれば、統計全体で見れば必ずしも全てが強かったわけではない。それでも、BOEは高インフレの粘着性を判断するうえで、賃金の上昇率の高さを重視する可能性は高い。4週目のポンド相場は大幅に下落。引き金となったのは、23日に発表された8月のユーロ圏と英国のPMI速報値だった。特にユーロ圏の中核産業であるサービスのPMIは50.9から48.3に低下。市場予想(50.5)を下回り、今年初めて節目の50を下回った。英国のサービス業PMIも48.7と7月分の51.5から低下。ECBとBOEの金融引き締め策によるブレーキが、遂にサービス業にも及んでいることを示すものであろう。5週目のポンド相場は、29日に公表された米7月JOLT求人件数の減少が確認されたことや、31日に公表された米8月ADP雇用統計が市場予想を下回ったこともあり、対ドルで反発している。

■ 今月の見通し

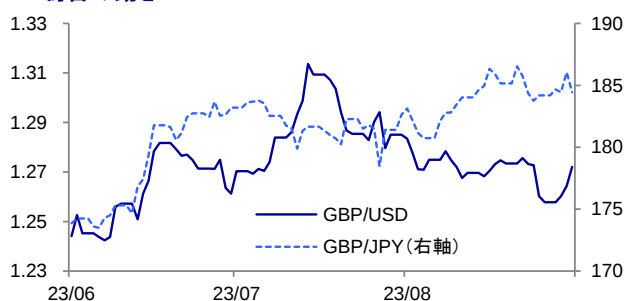
今後1か月間の英ポンド相場は引き続き対ドルでは上値の重い展開が続くそう。市場が織り込むターミナルレートは、7月末時点の5.794%から8月15日に発表された週平均賃金(賞与除く)は4~6月期に前年同期比で+7.8%上昇したことを受け、いったん6.0%を織り込む水準に上昇した。しかし、23日に公表された英8月サービス業PMI(速報)が48.7と7月分の51.5から大幅に低下したことを受けて、市場が織り込むターミナルレートは5.76%近辺まで下落している。経済指標では、9月12日(火)に発表される労働市場関連統計や、9月20日(水)に発表される英8月CPIが重要だ。サービス業の景況感悪化が賃金やサービス価格の減速にも表れてくるようであれば、BOEに対する追加利上げ期待は大幅な後退を迫られることとなる。一方、ポンドの対ドル相場の方向性を占ううえでは、米景気の動向も重要だ。目下、米7月JOLT求人件数の減少が確認されたことなどもあり、米金利低下、ドル安で反応している。もっとも、米国の景気指標はたしかにこのところ市場予想を下回る展開が続いているが、8月のユーロ圏及び英国のサービス業PMIで示されたような決定的な悪化を示すものではまだ無いという認識だ。いずれ、米景気の底堅さが意識される形でドルが欧州通貨に対して再び上昇するシナリオの蓋然性が高いように思われる。対円相場では、ここ2か月は、円の独歩安に伴うポンド/円の上昇が目立っている。ドル/円相場の見方に関しては、『中期為替相場見通し』をはじめ他の原稿を参照されたいが、日銀の本格的な政策修正期待が高まらない限り、ドル/円ひいてはポンド/円上昇の流れは変わらないだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の食事・レストラン事情について』
今年3月にロンドンに来てから、レストランには片手で数えるほどしか行っていないのですが、英国人の同僚に教えて貰った南西部リッチモンドにある「Petersham Nurseries」は良かったです。ガーデニングの店の中にカフェやレストランが併設されており、内装に生け花をふんだんに使った素敵な空間でした。食事も自然素材を使ったもので美味しかったです。ロンドンはお金を出せば美味しい食事ができると言われるそうですが、それを実感しました。ただ、ロンドンのレストランに行く際に忘れてはならないことが一つあります。それは、決して現在のポンド円のスプレッドで値段を換算してはいけないということです。「1ポンド=100円」で換算すれば、納得感を持ってレストランに行くことができます。この夏に日本に一時帰国した駐在員の家族からは、「日本に帰ると何もかも安くて美味しいので外食し放題だけど、胃が追い付かない」と聞きましたが、ロンドンの物価を見るにつれ、本当に日本は安いのだなあ、と感じます。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	ネーションワイド住宅価格指数(前年比)	7月	-4.0%	-3.8%	-3.5%
8/3	イングランド銀行政策金利		5.25%	5.25%	5.00%
8/11	GDP(前期比)	2Q	0.0%	0.2%	0.1%
8/15	週平均賃金(前年同期比)	4-6月	7.40%	8.20%	7.20%
8/15	失業率	6月	4.0%	4.2%	4.0%
8/16	CPI(前年同期比)	7月	6.7%	6.8%	7.9%
8/18	小売売上高(前月比)	7月	-0.6%	-1.2%	0.6%
8/23	製造業PMI	8月	45.0	42.5	45.3
8/23	サービス業PMI	8月	51.0	48.7	51.5
8/30	住宅承認件数	7月	51.0K	49.4K	54.6K

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6300 ~ 0.6700
AUD/JPY 92.30 ~ 96.30

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

8月は0.6717でスタート後、豪ドルに重しとなる材料が相次ぎ、月中に年初来安値を0.6365まで更新。月末にかけては0.64台後半まで戻して越月した。月初、RBAが政策金利据え置きを決定。加えて資源価格の反落や米大手格付会社による米長期国債の格下げ報道、堅調な米7月ADP雇用統計の他、豪4～6月期小売売上高が3四半期連続の減少となり、0.65ドル台前半へ下落した。中国7月貿易収支が輸出入ともに予想を下振れした事や米銀の格下げなどを背景にリスクオフの流れから一時0.64台まで下落。但しハーカー・フィラデルフィア連銀総裁(投票権あり)が利上げを終了できる可能性を示唆した事や豪州のLNGプラントでストライキの可能性が高まり、供給懸念からLNG価格が40%上昇し押し上げられ豪ドルは0.6571まで上昇した。10日は米7月CPIが鈍化し、その他米雇用データで弛緩が見られる事から9月FOMCでの金利据え置きの公算が高まり、ドル売りを背景に0.6617まで上昇。中旬はロウRBA総裁が議会証言で「今後は微調整が必要となる可能性が高い」と述べ、追加利上げの可能性に含みを残した事で豪ドルは0.6533まで上昇。RBA議事要旨では「打倒な時間枠の範囲でインフレ率を目標に戻すには更なる引き締めが必要になる」と追加利上げに含みを持たせた事から0.6521まで値を上げたものの、FOMC議事要旨で示されたタカ派姿勢を背景としたドル買いに押され、0.64台前半まで下値を拡大した。豪7月雇用統計が予想を下振れ0.6365まで下落。下旬、中国人民銀行が1年物ローンプライムレートを▲10bp引き下げるとも下げ幅が予想比小さく、人民元売りにフォローする形で一時0.6388まで下落。23日、豪輸出勢による豪ドル買いが相次ぎ、一時0.64半ばまで上昇。フローが一巡すると0.6410近辺まで下げたものの、米8月PMIが下振れすると米利上げ停止観測が広がるとドル売りを背景にショートカバーで踏みあげられ一時0.6481まで上昇した。マチルダ効果で一時的に押し上げられた豪7月小売売上高や豪地場コーポレートの配当金準備等の豪ドル買いを背景に0.64台半ばまで上昇するも比較的大きなオプションピンが0.6410にあったためガンマ勢による売りの攻防で0頭を押えられた。月末にかけては豪7月CPIが前年比で予想以上にインフレが鈍化し、9月豪利上げ見込みが後退すると0.6450まで下落するも米景気減速を示唆する経済データが相次いだ事で、米利上げが終わりに近づいているとの見方が強まるとドル売りから豪ドルが再び上昇し0.64台後半を中心に推移した。

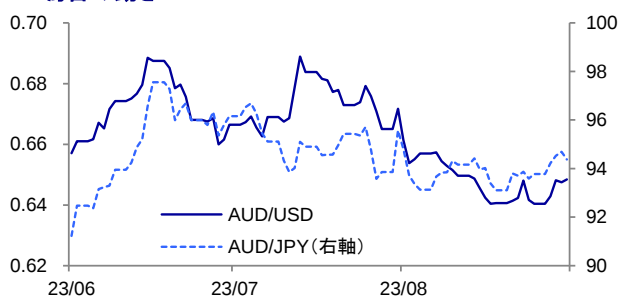
■ 今月の見通し

8月は豪ドルの重しとなる材料が相次いだ。豪国内では豪2Q金指数が下振れ、豪7月失業率が3.7%まで上昇した事で、豪雇用環境の弛緩が示された。豪労働市場からのインフレ上昇圧力が緩和されたとの見方から、微調整とされる豪追加利上げ観測は後退した。中国からの豪ドル下げ材料としては中国人民銀行が1年物ローンプライムレートを10bp引き下げたものの、下げ幅が市場予想よりも小幅だったことである。市場は落胆の色を隠せず人民元が軟調に推移すると豪ドルの重しとなった。中国景気減速を示す指標が引き続き発表され、刺激策を迫られた中国政府は証券印紙税などを含む一連の政策を実施したが市場への効果は短命に終わってしまったように見える。そんな中で豪ドルを下支えたのが8月末から9月にかけて出てくる豪輸出企業の配当金準備の豪ドル買いフローと米景気減速を示唆する経済データである。

9月は引き続きコーポレートの豪ドル買いフローに支えられる場面もありながら、米豪の経済減速スピードを比較しながらの攻防となろう。米金融政策に関しては、注目されたジャクソンホールでのパウエルFRB議長の講演で米金融政策方針を決定的に示す材料に欠けた為、注目は9月FOMC会合に移っている。9月FOMC会合では米政策金利は据え置きとの見方が大半だが、ドットチャートにおいて2023年末、2024年末時点の政策金利が前回のドットチャート発表の6月時点から引き上げられるかに注目が集まる。米利上げサイクル終了後、どの程度の期間、米政策金利を高水準で維持するのが焦点となろう。6月時点から政策金利予想が引き上げられた場合、ドル買いから豪ドル下げ材料となる可能性が高い。豪金融政策に関しては9月中旬にRBA総裁が現ロウ総裁からブロック副総裁へ交代となる。8月29日、ブロック副総裁は講演で「追加利上げの是非は月ごとに当面判断していく」としたものの、インフレが依然高すぎるとしてインフレとの闘いが最優先課題になるとしていた。足元ではスクールホリデーやマチルダ効果などの特需から豪7月小売売上高が押し上げられたが、その他ではインフレ圧力の緩和を示唆する指標も複数発表されており、RBAによる利上げ圧力も緩和される方向にある。このトレンドが続けば、豪ドルは頭を押えられて推移する可能性が高い。この他、中国の軟弱指標発表など、中国経済の先行き不安が高まる場面では豪ドルは引き続き下押しするとみる。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	RBAキャッシュレイト	1Aug	4.35%	4.10%	4.10%
8/3	貿易収支	Jun	A\$10750m	A\$11321m	A\$10497m
8/8	ウェストパック消費者信頼感	Aug	-	-0.40%	2.7%
8/15	賃金指数(前年期)	2Q	3.70%	3.60%	3.70%
8/17	雇用者数変化	Jul	15.0k	-14.6k	31.6k
8/17	失業率	Jul	3.6%	3.7%	3.5%
8/28	小売売上高(前月比)	Jul	0.3%	0.5%	-0.8
8/30	月次CPI(前年比)	Jul	5.2%	4.9%	5.4%

カナダドル相場

予想レンジ:

USD/CAD 1.3100 ~ 1.3700
CAD/JPY 104.00 ~ 109.00

米州資金部カナダ室 ミタリ・チャクラデオ
岩田 保子

■ 先月の為替相場

8月は中国経済に対する懸念に加え、財政赤字穴埋めのための米国債供給増や根強いインフレ、リセッション確率の低下等を背景に米金利が急伸。USDが主要通貨に対して全面高となり、7月に一時1.3093まで下落したUSD/CADも2カ月ぶりに1.36台半ばまで上昇した。

1.3190でオープン後、初旬は中国の7月製造業PMIが年初来の最低値となったこと、また格付け会社フィッチが米国債の格付けを最高位から一段階引き下げたことから、リスク回避でUSD買いが優勢になった。8/4に発表された米加7月雇用統計は強弱混じった内容で、USD/CADは一時下落したものの、長くは続かず、1.34台手前まで買い戻された。8/7に発表された中国の7月貿易統計では赤字額が増大。世界経済の減速懸念が広がり、米株価と原油価格も大幅下落し、USD/CADは5月末以来となる1.35を超えた。

中旬は、米7月CPI・PPIは概ね予想と一致した他、カナダ7月CPIはコアが前月から若干上昇し、USD/CADは一時下落。その後は、市場で中国の不動産不況に対する懸念が台頭。またオンショア人民元が対USDで16年ぶりの安値をつけるなど中国の経済動向が不安視され、USD/CADは1.3575まで上昇した。

下旬は、米10年債利回りの上昇に連れてUSD買いが継続。8/23に発表されたカナダの6月小売売上高は軟調な結果になり、9/6カナダ中銀会合での利上げ確率とカナダの長期金利が大幅に低下。CAD売り優勢となり、USD/CADは1.3600を上抜けた。その後は8/25のジャクソンホール会合でのFedパウエル議長講演まで1.35台で推移。同議長は追加利上げの必要性を否定しなかったことから、講演後USD/CADは一時1.3640まで上昇。しかし、8/29に発表された米国の消費者信頼感と求人件数が予想を下回ったことから、消費及び労働市場での減速感が意識され、米金利が大幅に低下するにつれUSD売りが進み、USD/CADは1.36台前半から1.3570近辺まで急速に下落した。

■ 今月の見通し

米国、カナダの利上げが最終局面にある中、インフレは純化しつつあるが根強く、かつ経済は想定以上に底堅さを維持している。そのため市場では、米国の高金利が長期にわたって続くとの見方が広がっている。一方、8月以降、国債市場では、米10年債利回りを中心に米国の長期金利が急伸しており、8月のUSD上昇の背景となった。また、中国経済への不安の高まりが、リスク回避のUSD買い・CAD売りをもたらした。

今後の相場見通しの焦点は、FEDもカナダ中銀も「今後の金融政策はデータ次第」とのスタンスを維持していることから、引き続き、米国、カナダ、中国などの経済動向になると予測。利上げ開始から間もなく1年半となるが、FEDもソフトランディングに自信を深め、市場でもハードランディングの確率が低下しているが、カナダでは、米国に先行して消費動向に高金利の影響が表れるようになってきた。住宅ローンの利払い増加率が過去最高を記録していることに加え、小売売上高は4月以降鈍化傾向にあり、6月分は総合で前月比横這い、自動車を除くと2カ月連続で前月比マイナスの▲0.8%、また人口増にも関わらず、ボリュームでは前月比▲0.2%と減少した。

消費に減速感が見られてきたこと、また8月雇用統計の発表が9/8と遅れることから、9/6のカナダ中銀会合ではこれまでの金融引き締め効果を精査するためにも、政策金利は据え置かれることを予想する(8/29現在、市場での9/6会合の利上げ確率は約26%)。USD/CADについては、先月に続き、財政悪化に伴う米国債の供給増によって米長期金利が上昇しやすい環境が予想されること、また不動産市場をはじめとする中国経済への懸念から、9月もUSD高買い優勢の展開を想定。ただし、堅調さを維持してきた米国の労働市場に変調が生じてきた場合には、米国の年内追加利上げの見通しが後退し、米金利低下→USD下落という動きが強まるものと予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の食事・レストラン事情』

日本料理は何世紀にもわたる伝統によって作られてきましたが、カナダ料理は人口の多様性を反映し、より多文化的である。

トロントでは、生の魚をトルティーヤで巻いた「寿司ブリトー」を提供するレストランがあることにびっくりした。日本とメキシコの美味しいブレンドだ。

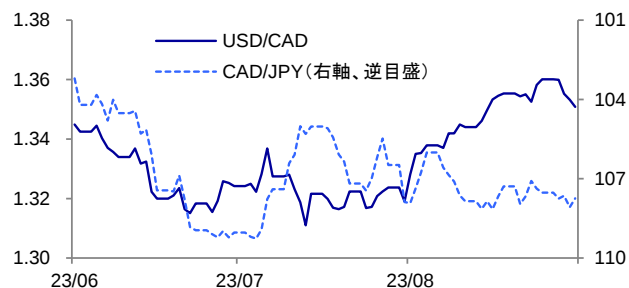
米が主食の日本とは異なり、カナダではパンやパスタなど小麦を使った製品の方が人気。ほとんどの家には大きなオーブンが備え付けられており、パン作りを日常に取り入れることが可能。また、特に夏に友人や家族のためにパーベキューを主催することもカナダ文化の一部となる。

地理的な位置を考慮すると、カナダと日本はどちらも料理にシーフードが強く存在する。特にロブスターとサーモンはカナダ全土で広く楽しまれています。

レストランのでは料理の量は大きく異なる。日本では食事は小皿で少量ずつ提供される一方、カナダでは1品を2回に分けて食べられるほど量が多い。

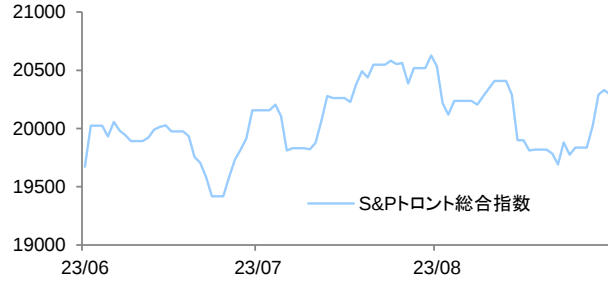
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	7月	-	49.6	48.8
8/4	雇用ネット変化率	7月	25.0K	-6.4K	59.9K
8/4	失業率	7月	5.5%	5.5%	5.4%
8/9	住宅建設許可(前月比)	6月	-3.5%	6.1%	10.5%
8/15	製造業売上高(前月比)	6月	-2.0%	-1.7%	1.2%
8/15	CPI 季調前(前月比)	7月	0.3%	0.6%	0.1%
8/16	住宅着工件数	7月	244.0K	255.0K	283.5K
8/18	鉱工業製品価格(前月比)	7月	0.1%	0.4%	-0.6%
8/23	小売売上高(前月比)	6月	0.0%	0.1%	0.2%
8/23	小売売上高(除自動車/前月比)	6月	0.3%	-0.8%	0.0%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1290	～	1350
KRW/JPY	10.75	～	11.36
JPY/KRW	8.80	～	9.30

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

8月のドル/ウォン相場は人民元に連れられ上昇。月初1日のドル/ウォン相場は1,276.2ウォンでオープン。朝方、中国のPMI指数が予想比悪化したことを受け人民元が売られたことで上昇。2日の朝方には米格付け会社が米国債の格下げを発表。市場センチメントが悪化し、韓国株安とともにウォン安が進行した。3日には1,300ウォンの節目を上抜け、4日にかけて1,310ウォンまで急速にウォン安が進んだ。翌週の7日に実需と見られるフローから一時ドル/ウォンは1,300ウォンを割れるも、8日に中国の軟調な貿易統計を受け一段と人民元安が進行しウォン安に転じた。9日には米国の中小銀行の格下げが発表されたことでリスクオフムードから1,320ウォンを上抜けた。11日は中国の7月融資統計が予想を大幅に下回ったことで、人民銀行による金融緩和観測が高まり人民元安が進行。ドル/ウォンは1,325ウォン付近まで強含んだ。翌週14日にドルウォンは1,330ウォン台でオープン。韓国休日日の15日には中国人民銀行が中期貸出制度(MLF)金利を予想外に引き下げたことで人民元安が進行。16日もウォン安が継続し、17日にドル/ウォンは年初来高値の1,343.0ウォンを付けた。18日に中国当局が元安抑制の為に基準値を市場予想対比大幅に元高に設定するとウォンは一時1,330ウォン台前半まで強含んだ。翌週21日に再びドル/ウォンは年初来高値である1,343.0ウォン付近まで上昇するも、韓国当局によるウォン安抑制姿勢も見られ、上値は押さえられた。その後はジャクソンホール会合でのパウエル議長講演に対する警戒感から小動きが続くも、24日に米金利が低下するとウォン安は一服し、一時1,320ウォンを割れた。24日のBOK会合では5会合連続で政策金利の据え置き(3.50%)が決定されるも、市場予想通りの内容に相場への影響は限定的だった。翌週28日・29日はジャクソンホール会合での当局者発言を消化した流れの中で小動き。月末に関連したウォン転需要によりやや上値重く1,320ウォン台前半での推移が続いた。月末にかけては売り買い交錯し、結局1,321.8ウォンで引けた。

■ 今月の見通し

9月のドル/ウォンは1,300ウォン台前半でもみ合い推移を予想する。

8月24日に行われたBOK会合においては、5会合連続で現行政策金利の維持が決定された。韓国の7月CPIは前年比+2.3%と減速が確認されているものの、BOKはインフレが秋以降再加速する可能性も示唆しており、景気抑制的な政策スタンスをかなりの期間維持するとあらためて表明した。一方で、半導体市況の本格的な回復が遅れていることもあり、同時に発表された経常収支見通しも23年は前年割れ、本格的な回復は24年後半と見込んでいる。多くの当局者は将来的に必要と判断されれば追加利上げの可能性にオープンだとしているものの、当面政策金利は据え置きが続くと考える。

海外動向では、注目されたジャクソンホール会合でのパウエルFRB議長講演において「データ次第で利上げ」のスタンスを再確認する結果となった。米インフレ動向は鈍化傾向が続くも依然高水準にあり、利上げ余地を残した格好。米ドルは9月FOMCに向けて経済指標データの内容を見極める展開になるとみられる。

また、8月は人民元安が進行したことでウォンも売られた。中国政府は貸出金利の引き下げや景気刺激策を打ち出し、人民元安進行は一服感があるもその効果には見極めが必要であることから人民元が大幅に反発する可能性も低からう。

上記のように、9月のドル/ウォンは外的要因に左右される展開が続くとみられるも、ドル高や人民元安も8月に比べると落ち着くとみられるほか、年初来高値の1,340ウォン付近では8月同様当局のウォン安抑制姿勢も強まると見られ同水準では上値が押さえられよう。一方で、ウォン買い材料にも乏しくドル/ウォンは1,300ウォン台前半での推移が続くと予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の食事・レストラン事情』

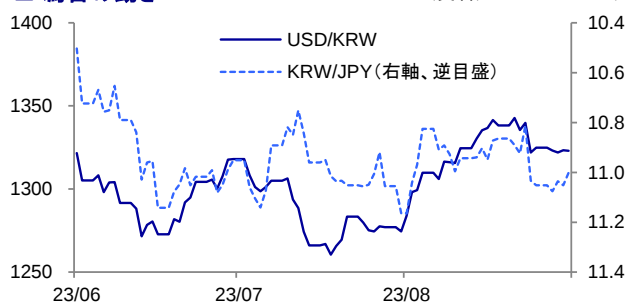
当地に着任した当初は食事面である困難に陥りました。それは、一人で入り易いようなお店が見当たらなかったことです。韓国では、食事といえば複数人で食べるものというのが一般的でおひとり様はテーブルの配置的にもあまり受け付けておらず、料理も注文は二人前からといった但し書きがあったりします。当時は定食屋のチェーン店もなかなか見つけれませんでした。しかし、これでもコロナ禍を経ておひとり様需要に対応しているお店も増えているとのことで、幾分初心者にも易くなっているそうです。

また、以前は韓国の食事は安いとの評判もあったそうですが、ソウルの中心部で生活している限りにおいてはそれを感じることはできません。ランチの際も日本円相当で1,000円以下のお店を見つけることが難しくなっており、お店のメニュー表には値札を切り貼りして値上げした痕跡が見て取れ、インフレの影響が如実に感じられます。

ただ、当地の食事には基本的にハズレが無く、どの料理もおいしいことには間違い無いです。食べ過ぎにはご注意ください。

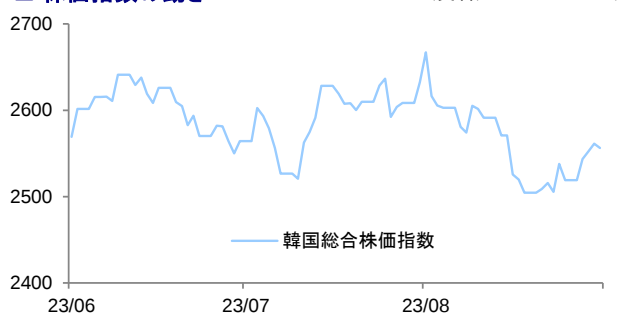
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	貿易収支	7月	2,600M	1,630M	1,130M
8/1	輸出(前年比)	7月	-15.0%	-16.5%	-6.0%
8/1	輸入(前年比)	7月	-25.0%	-25.4%	-11.7%
8/2	CPI(前月比)	7月	0.2%	0.1%	0.0%
8/9	失業率	7月	2.7%	2.8%	2.6%
8/22	消費者信頼感	7月	-	103.1	103.2
8/24	BOK政策金利	-	3.5%	3.5%	3.5%
8/24	PPI(前年比)	7月	-	-0.2%	-0.2%
8/31	鉱工業生産(前年比)	7月	-6.0%	-8.0%	-5.6%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 31.50 ~ 32.10
TWD/JPY 4.55 ~ 4.68

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

8月のドル/台湾ドルは上昇し、年初来高値を更新。

月初の8月1日は31.350でオープン。外国人投資家の受取配当金を海外へ送金する流れが継続し、台湾ドル売りが優勢になり、約8か月ぶりに31.5台に乗せた。2日には米国債の格下げから安全資産への逃避もあり、30.6台まで上昇。その後は台風による休場もあったものの、4日に31.7台に乗せたが、この水準では輸出企業のドル売りが入り、上値は押さえられた。しかし、8日には中国の貿易統計が輸出入共に予想以上に減少したことや台湾株の下落を受け、台湾ドル安が進み、31.8台まで上昇。

月央は米7月CPIの結果を受けてアジア通貨が軟調に推移する中、台湾ドルも軟調に推移。さらに、14日には中国景気への懸念等から台湾株が急落するとつられて台湾ドルも売られ、31.9台まで上昇。15日は中国のサプライズ利下げもあり、中国経済への警戒感が一段と高まり、一時31.990まで上昇。しかし、節目の32を前に輸出企業等からドル売りが入り、上値は押さえられた。

月後半に入っても人民元安や軟調な台湾株を背景に、ドル/台湾ドルは底堅く推移していたが、輸出企業のドル売りもあり、上値も重く、31.90付近のレンジで推移。その後、米半導体大手の好決算を受けて、24日に台湾株が急騰するとドル/台湾ドルも31.75付近まで下落。ただし、長くは続かず、すぐに戻すとドル/台湾ドルは31.8台で推移した。

■ 今月の見通し

9月のドル/台湾ドルはレンジでの推移を見込む。

8月は中国経済への警戒感からリスクオフの流れとなり、台湾ドルは売られやすかった。台湾の輸出は中国向けが多く、7月の輸出額を見ても約35%が中国・香港向けであり、中国の影響は大きい。ただし、中国への輸出品は電子部品が中心であり、世界的なPCやスマホの買い控えの影響もあることには留意したい。

9月についてはレンジでの推移を見込む。8月は台湾ドルが売られたものの、高値圏では輸出企業のドル売りが上値を押さえる場面も多く、節目の32台には届かなかった。輸出が減っているものの、輸入がそれ以上に落ち込んでおり、結果、貿易黒字は拡大傾向にあり、7月は84.8億ドルと単月ベースでは過去最高水準にある。軟調な台湾株、高水準が続く米金利と台湾ドル安材料が多いものの、貿易黒字が上値を押さえ、レンジでの推移が続くであろう。

なお、9月については四半期に一回の台湾中銀の金融政策決定会合を控えているが、2会連続の据え置きを見込む。CPIについては直近2か月は2%を下回って推移していること(コアについては依然として2%台後半ではあるが)、世界的な需要不足による輸出の減少が続いていることを考慮すると、欧米で利上げが続いたとしても利上げは行わないであろう。警戒している不動産価格の上昇も前回6月の会合時やそれ以前から行ってきた不動産購入時の規制等に対応することも可能である。また、足許のドル/台湾ドルの水準は歴史的にみても安すぎるわけでもなく、台湾ドル売りを防衛するために利上げすることはないと見込む。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の食事・レストラン事情』

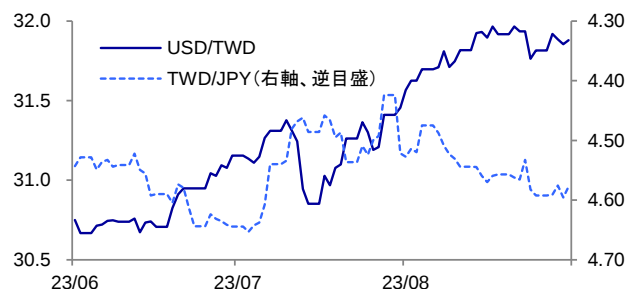
当地では外食文化が根付いており、小吃店(シャオチーディエン)といわれる食堂が多く、また中華だけでなく、様々なジャンルの料理もあります。日本の牛丼や回転すしのチェーン店なども進出しており、日本の味も食べられますし、価格帯も屋台からミシュランのお店までピンキリです。

日本と異なるところは、ほとんどの店がテイクアウトを行っており、配送サービスも発展しています。店内で食べても、残った料理を包んで持って帰ることも出来ます。その他では、自分で注文伝票を書いて渡す方式が多いです(最近QRコード読み取りも増えました)。メニューも漢字で書いてあるので、日本人でも注文しやすいかと。また、当地の方はよく食べるので、ランチなどは量が多めです。大盛にすると後悔する場合があるので、他の人の食べている器などで確認しましょう。おしゃれなカフェなどでは、メニューの名前もおしゃれになってしまうので、名前では料理が判別できない(台湾人も分からない)場合があります。その時は店員さんに聞か、写真を見せてもらうといいでしょう。

台湾っぽいという早餐店(ザオツァンディエン、朝ごはん屋)と夜市。早餐店は朝早くから開いており、朝から外食が出来ます。台湾らしいお粥や豆乳、蛋餅(ダンペン)等を食べられます。平日ならテイクアウトして会社で食べる人も少なくないです。一方の夜市は毎日屋台が出ており、値段も安く、種類も多いです。ただ、観光夜市以外は屋台でお酒を売っていることは少ないので注意してください。

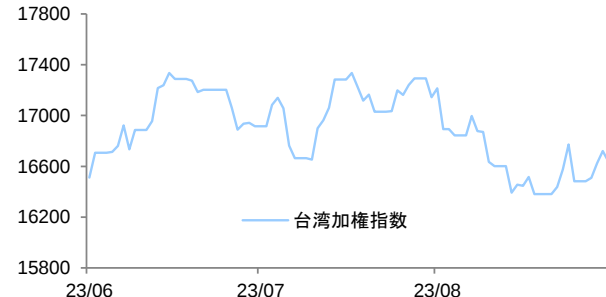
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/4	外貨準備高	7月	-	566.49B	564.83B
8/8	輸出(前年比)	7月	-20.7%	-10.4%	-23.4%
8/8	輸入(前年比)	7月	-25.3%	-20.9%	-29.9%
8/8	貿易収支	7月	5.65B	8.48B	5.96B
8/9	CPI(前年比)	7月	1.90%	1.88%	1.75%
8/18	GDP改定値	2Q	1.49%	1.36%	1.45%
8/21	輸出受注(前年比)	7月	-15.50%	-12.00%	-24.90%
8/21	経常収支	2Q	-	22.24B	19.01B
8/22	失業率	7月	3.50%	3.43%	3.45%
8/23	鉱工業生産(前年比)	7月	-14.20%	-15.20%	-17.25%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8000 ~ 7.8500
HKD/JPY 18.20 ~ 19.00

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【8月の香港ドル直物相場】

8月の香港ドル直物相場はトレンドが反転し、7.79台から7.84台半ばまで急落した。米ドルと香港ドルの短期金利差が拡大し、米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードのポジション構築が再び旺盛になってきた。T/Nのフォワード・ポイントを見るとマイナス6ポイント近辺まで低下しており、キャリートレードの収益性が再拡大していることを示している。また、配当金見合いの香港ドル資金需要が一服したことも下落圧力となった。株式市場に目を向けると、中国の不動産市場を巡る混乱が深刻化したことで人民元も下落する中、対中関連投資への意欲が減退し、ハンセン株式指数も急落した。香港のIPO市場は引き続き低迷したが、中国本土の投資家が割安な投資対象を求めた為、ストックコネク(中国本土市場との株式相互取引制度)による香港株式市場への資金流入は回復した。一方で、香港の景気回復は勢いを失い始めている。7月の香港PMI指数は5ヵ月連続で低下し、今年初めて節目の50を割り込んだ。国内消費は回復したが、貿易部門の悪化が続いている。一方、労働市場はタイトな状況が続いており、失業率は2.8%まで低下した。

【8月の香港ドル金利市場】

香港ドルHIBORはカーブ全体で低下圧力がかかり、1ヵ月物は5.43%から3.80%以下に、3ヵ月物は5.43%から4.50%以下に低下した。特筆すべきはオーバーナイトの香港ドルHIBORで、6月上旬以来初めて2%を割り込んだ。ハンセン中国企業指数に採用されている企業の配当情報に基づき計算した所、配当金支払いは7月29日の週にピークを迎えていた。また、シルバーボンド(60歳以上の高齢者に対象を絞った公債)の募集期間終了が終了したことも、香港ドル資金需要の低迷に繋がった模様だ。一方、香港ドル直物相場はベッグ制のレンジ内に収まった為、HKMAのアグリゲートバランスも450億香港ドル近辺で横ばいとなった。中長期金利については、8月後半に開催されたジャクソンホール会合で米国連邦準備理事会(FRB)のパウエル議長が追加利上げの可能性について否定しなかった為、米ドルスワップ金利が上昇、香港ドルスワップ金利も追従して上昇した。

■ 今月の見通し

【9月の香港ドル直物相場】

米ドルと香港ドルの短期金利差が拡大しキャリートレードを狙う動きが増えていることを受け、9月の香港ドル直物相場はベッグ制の上限である7.85に向かう可能性がある。パウエルFRB議長は追加利上げの可能性を否定しなかった為、引き続き米ドル買いの地合いは根強い。他方、香港ドル建ての配当金支払いがピークアウトしていることや、IPO活動が低迷していることから香港ドル資金需要も後退している。さらに悪いことに、中国の不動産市場を巡る混乱を受けて、投資家は香港・中国関連株への投資残高を減らしている。こうした動きが長引くと、香港金融市場からの資金流出圧力が続き、香港ドル資金需要の減少も相まって香港ドル安圧力が強まる可能性が高い。

【9月の香港ドル金利市場】

配当金支払いに伴う香港ドル資金需要が落ち着いた為、現在も香港ドル金利はカーブ全体で低下している。香港の銀行は香港ドル定期預金等を通じて十分な香港ドル資金を確保できている様子であることも、香港ドル短期金利の上値を抑えるだろう。しかし、足元のHKMAのアグリゲートバランスが低水準のままであることを考えると、一段の金利低下幅は限定的となる見通しだ。香港ドル直物相場がベッグ制の上限である7.85に達した場合、HKMAは米ドルベッグ制を維持する為USD売り/HKD買いを替介入を実施する必要がある、一段と香港ドルの流動性が減少する可能性はある。しかし、著しい影響が見られない限り、香港ドルの流動性を確保すべく、為替基金証券(EFBNs)の発行を減らすといった手段を取ることはないと見ている。一方で、第3四半期末に向けた季節性需要と、市中流動性の余剰が限られていることが、香港ドル金利を下支えするとも考えられる。また、香港ドル金利の振れ幅が上昇していることから、香港の銀行がHKMAの割引窓口貸出制度(ディスカウント・ウインドウ)を利用する頻度を高めていることは注目に値するだろう。

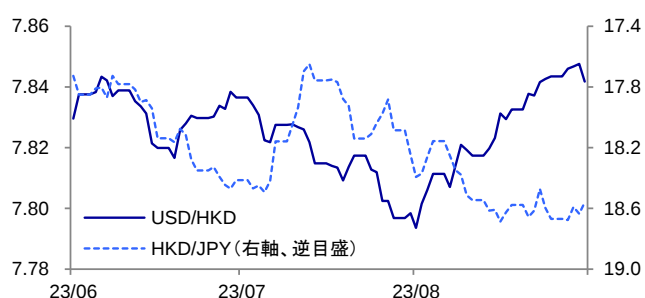
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『香港の食事・レストラン事情』

多種多様な料理で知られる香港では、旅行者はエキサイティングな食体験の数々を楽しめます。本当に様々なスタイルの料理やレストランがあるので、この活気溢れる街でどれだけ食べ歩いても飽きることはないでしょう。例えば賑やかな茶餐廳に足を運べば、香港のローカル料理を食べることができます。茶餐廳は美味しい香港式料理を手早く提供してくれることが売りなので、フォーマルな食事は期待しないほうがいいでしょう。新型コロナウイルスの流行以来、QRコードによるセルフサービスが一般的になり、注文から食事まで一段と効率的に楽しめるようになりました。もし洗練された高級レストランで食事を楽しみたいのなら、ミシュランの星付きレストランも数多く店を構えています。席の予約も比較的簡単で、こうした店では格別なグルメの旅を楽しむことができます。一方で、屋台料理を食べてみれば、また一味違った食体験を堪能できます。旺角や廟街のナイトマーケットを歩けば、ジュージューと音を立てるフィッシュボールや臭豆腐の串焼き、熱々のエッグタルトやふわふわのパイナップルパンまで、様々なものを見つけれられます。手頃な値段でも味わい深いこれらのご馳走は、香港の食の真髄を味わせてくれるでしょう。

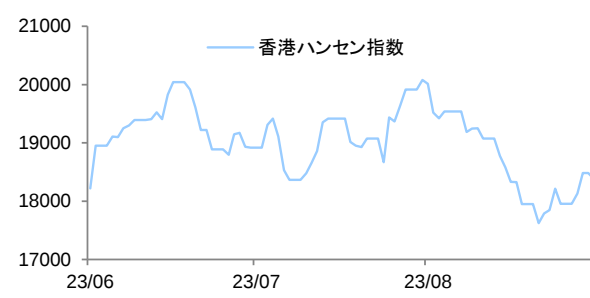
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	小売売上高(価額・前年比)	6月	19.1%	19.6%	18.5%
8/3	S&P Global Hong Kong PMI	7月	-	49.4	50.3
8/7	外貨準備高	7月	-	\$421.6b	\$417.3b
8/11	GDP(前年比)	2Q F	1.5%	1.5%	1.5%
8/17	失業率(季調済)	7月	2.9%	2.8%	2.9%
8/21	CPIコンボジット(前年比)	7月	1.9%	1.8%	1.9%
8/24	輸出(前年比)	7月	-8.8%	-9.1%	-11.4%
8/24	輸入(前年比)	7月	-5.9%	-7.9%	-12.3%
8/24	貿易収支(HKD)	7月	-41.3b	-30.0b	-56.6b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	7.0000	～	7.3500
	CNY/JPY	19.41	～	20.62
	100JPY/CNY	4.8500	～	5.1500

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉小絵

■ 先月の為替相場

8月のドル人民元(USDCNY)は上昇後、上値の重い展開。

ドル人民元は1日、7.15台半ばでオープン。公表された7月中国製造業PMIは国家统计局公表の結果が49.3(7/31)、民間統計である財新の結果が49.2(8/1)と、どちらも節目の50を下回る中で元安圧力が強まった。その後、米国価格下げを受けた米金利上昇を背景としたドル高の動きに、2日には一時7.19台後半へ上昇も、上値追いは限定的となり一巡後には軟化。4日には7.15台半ばで寄り付いた後、雇用統計のヘッドラインを受けてドル安からドル高に反転し、7.17台前半まで上昇してクローズ。7日、7.18台後半でオープン。4日に発表された米雇用統計がクローズ後も材料視されて元安方向へのギャップオープンとなった。8日、PBOC仲値がそれまでの7.13-14台から約1か月ぶりに7.15台に引き上げられ元安方向に調整されたことで、実勢相場も7.20台で寄り付き後7.22台前半まで上げ幅を拡大。8日の貿易統計、9日の物価統計は軟調な結果となったものの、為替市場への影響は乏しく推移。10日夜間の米7月CPIを受けてドル高が進行し、11日は7.23台後半まで上昇してクローズ。14日、7.25近辺でオープン。15日、市場が据え置き予想をしていたMLF金利(1年物)が15bpの引き下げとなったことに加え、小売売上高、工業生産等の主要経済指標も事前予想比弱い結果となり、元安地合いで推移。17日には7.31台後半まで上値を伸ばしたが、その後に元安阻止に関する観測報道を受けてUSDCNYは7.27台半ばまで急落。18日は7.28台半ばでクローズ。21日、7.29台半ばでオープン。同日オープン前に発表されたLPRの結果が1年のみ10bp引き下げと事前予想よりも引き下げ幅が小さかったことを受けてUSDCNYは7.31台半ばまで上昇。夕方に入るとオフショア市場主導で人民元買いが進み7.27台まで元高推移。その後は上値の重い推移が続き、7.26台～7.29台でのレンジ推移が継続し、越週後の30日日中も7.29台での推移となっている。

■ 今月の見通し

下値を試す展開を想定も、ドル高元安圧力には留意。

米国は9月のFOMCが次の焦点。現時点での短期金利市場における年内利上げ確率は半分程度しか織り込まれておらず、データ次第の状況は7月FOMCのパウエル議長の発言時から変わり無し。堅調な経済指標が続く場合には金利市場への追加利上げ織り込みと共に為替市場もドル高へ戻す展開には警戒が必要であるが、長期的には年内の利上げ停止や来年以降の利下げ開始時期に関する議論が始まると共にドル安が進んでいくのがメインシナリオ。

他方、中国においては元安材料が多数ある状況。8月の軟調な経済データ、MLF/LPR1年の引き下げ、不動産の購入規制緩和を筆頭とした経済対策が実施されたこと等はいずれも元安が進む材料となった。また、8月の中旬にPBOC仲値がこれまでの7.15から7.20台に引きあがったことで、日中の2%値幅上限が7.30から7.35台に引き上げられたこともドル人民元の実勢相場上昇の要因となった。

一方で、7月に実施された中資系銀行によるドル預金の定期預金金利引き下げや、企業の対外債務実施時のマクロブレンダー調整係数の引き上げは引き続き有効である他、オフショア人民元市場でのスポット・先物マーケットでの外貨売り元買いを実施しているという噂がある等、現水準以上の元安を食い止める対策も行っている。

その他、現状相場への大きな影響は見られていないが、対米、対日の地政学的リスクには留意する必要がある。

年初来高値付近での推移が継続する可能性はあるものの、米国利上げサイクルの終了に伴う米中金利差縮小を見据えたドル安を長期的なメインの予想としたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の食事・レストラン事情』

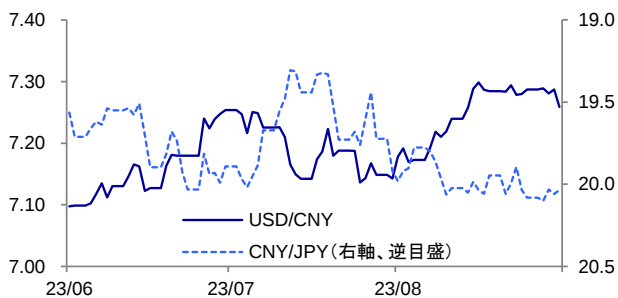
中国語が話せない私にとって、QRコードを読み取ってメニューを選択、代金の支払いも店員さんと話さずに完了できて、あとは料理が運ばれてくるのを待つだけ。という外食のシステムは何度か本欄でも紹介させていただいているのですが、日本ではまだまだ浸透していない便利な仕組みだと思えますので改めて記載しておきたいと思います。

上海に来て二年経って当たり前になってしまったのですが、初めて上海で中華料理を食べた際、日本と異なっていて驚いたのが乾杯の方法でした。日本だとグラスとグラスを軽く触れ合わせることで乾杯を行います。中国では「干杯」の発声の後、持っているグラスを机の上に打ち付けてコンコンコンと音を鳴らすことで乾杯を行います。大人数で円卓を囲むため対面の人と距離が出てしまう中国ならではの方法なのでしょう。

また、食事のマナーは時代と共に変わってきているようで、昔は中国では食事を残すことがお腹いっぱいご飯を頂きました、という意味を示すため礼儀と言われていましたが、サステナビリティが意識される昨今では、残さずきれいに食べましょう、ということが推奨されるようになりました。中国で美味しい料理が出てきたらしっかりと完食していただいて問題ございません。

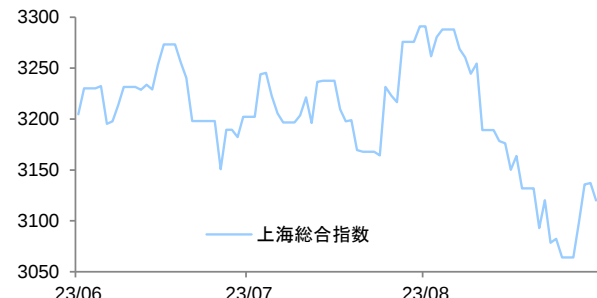
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/31	製造業PMI	7月	48.9	49.3	49.0
7/31	非製造業PMI	7月	53.0	51.5	53.2
8/8	貿易収支	7月	\$70.00b	\$80.60b	\$70.62b
8/9	CPI(前年比)	7月	-0.4%	-0.3%	0.0%
8/9	PPI(前年比)	7月	-4.0%	-4.4%	-5.4%
8/15	工業生産(前年比)	7月	4.3%	3.7%	4.4%
8/15	小売売上高(前年比)	7月	4.0%	2.5%	3.1%
8/15	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	7月	3.7%	3.4%	3.8%
8/15	MLF	-	2.65%	2.50%	2.65%
8/21	LPR1年物	-	3.40%	3.45%	3.55%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3200 ~ 1.3800
SGD/JPY 105.00 ~ 111.00

アジア・オセアニア資金部 森谷 友一

■ 先月の為替相場

先月のUSD/SGD相場は上昇する展開となった。

月初1日にUSD/SGDは1.32台後半で取引を開始。中国で発表された経済指標が冴えない結果となると全般的にアジア通貨売りが進む展開に。2日、前日に大手格付会社による米国債の格付け引き下げがリスクオフにつながるとUSD/SGDは1.34台前半まで上昇。3日は横ばい推移が続いたが、4日は海外時間に発表された米7月雇用統計で非農業部門雇用者数が市場予想を下振れたことを受け1.33台後半まで急落した。

7日は1.34を挟んだ方向感に乏しい推移となったが、8日に発表された中国の貿易統計が市場予想比下振れるとアジア通貨売りが進行。USD/SGDは一時1.35台前半まで上昇した。9日、中国人民銀行(PBoC)が市場予想より基準値を人民元高に設定すると1.34台前半まで下落した。10日、米7月CPIが市場予想を下回りドル売りが進む局面も見られたがすぐに1.34台後半まで上昇した。11日は米7月PPIが市場予想を上回り1.35台前半まで続伸した。

14日、米金利が上昇基調で推移する中、1.35台後半まで上昇。15日から16日にかけても底堅い推移が続いた後、17日は中国経済への懸念を背景に人民元売りが進む中、USD/SGDは1.36台前半まで上昇も、中国当局による元安けん制への警戒から人民元が反発するとUSD/SGDは1.35台後半まで反落した。

21日から22日は1.35台後半を中心とした方向感に乏しい推移が続いたが、23日に発表された欧米の8月PMIが市場予想を下回ると1.35台前半まで急落。24日も序盤はドル売りの流れとなるも海外時間に入り米金利が上昇すると1.35台後半まで上昇。25日、ジャクソンホール会議においてパウエルFRB議長が「追加利上げは適切な場合に実施する」と発言したこと等からドルが買われる展開となった。

28日は1.35台半ばでの方向感に乏しい推移となったが、29日は弱い米経済指標を受け1.34台後半まで下落する局面も見られた。

■ 今月の見通し

今月のUSD/SGDは底堅い推移を予想。

USD/SGDは7月前半から半ばにかけては下落基調が続き一時1.31台まで下落したものの、その後8月中旬までは一方的に上昇する展開となった。この値動きについてはドルインデックスと概ね同じ動きを見せており、ドル要因によるところが大きいと考えている。7月前半については弱い米経済指標の結果を受けてドル売り優勢の展開となる局面も見られたものの、7月後半のFOMCにおいて追加利上げの可能性が残されていることが示された上、8月後半のジャクソンホール会議でもパウエルFRB議長から改めて必要な場合には追加利上げを行う可能性を示しており、依然として市場においても相応に追加利上げ観測が残っている状況。ここから急速にインフレ圧力の低下や米経済指標の下振れが示された場合には別ではあるものの、足元で確認できるFedからのメッセージを見る限りではすぐに利下げに向けた動きを見せることは想定しづらく、基本的にはドルは底堅い推移が続くと予想。

シンガポールでは8月11日に第二四半期・GDP改定値が発表されたが、季節調整済みの前期比で+0.1%となり速報値の+0.3%から下方改定された。第一四半期の▲0.4%からプラスに転じテクニカルリセッションは回避しているものの、シンガポール貿易産業省(MTI)は2023年通年のGDP見通しについて従来0.5~2.5%としていたところを今回0.5~1.5%へと引き下げている。シンガポールにおける経済見通しが明るくはないことや足元ではインフレ圧力がピークアウトしていることを踏まえると10月に開催されるMAS会合において金融引き締めに動くとの思惑が高まることは想定しづらく、SGD買い圧力も高まりづらいだろう。

以上を勘案すると、引き続きドル買い圧力が優勢となる展開を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

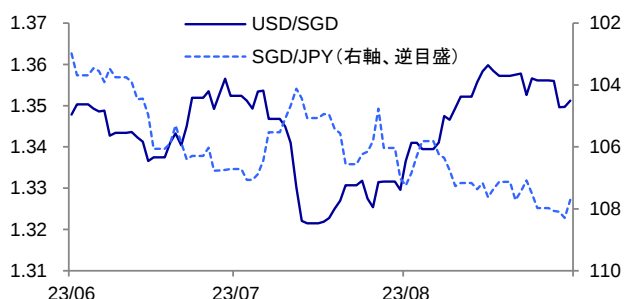
『当地の食事・レストラン事情』

当地では「ホーカー」とよばれる屋台が集まったスポットが有名です。オフィスの近くにある「ラオバサ」はシンガポール最大規模のホーカーで席数数は2,500席を超えているそうです。ちなみに、我々はオフィスの近くにあるもう一つの「アモイ」というホーカーも愛用させていただいています。

「ホーカー」は2020年12月にはユネスコ無形文化遺産に登録されており。ちなみに、お店の前にはAやBといったランクを表示しているお店がところどころに見られます。Aは、「Excellence in cleanliness & Food Hygiene」、Bは「Good in cleanliness & Food Hygiene」とNAE(National Environment Agency)から受けた評価です。ただ、Bやランクがないところでも行列ができています。お店はあり、当地の人たちの間ではこのランクはあまり意識されていないのが実情かと思います。我々も、ランクはBですが、美味しいチャーハンを提供してくださるお店に買い出しに行くことも多々あります。美味しいお店や人気のあるお店には行列ができるので、むしろそちらの方がバロメーターといえるかもしれません。アモイの2階には、毎日長蛇の行列ができるフィッシュスープのお店がありますが、3, 40人くらいの行列が常にできています。さぞ美味しいのだらうと、いつも思うのですが、さすがにその列に並ぶ気にはなれず、いつも横目に眺めています。(アジア・オセアニア資金部 甲斐)

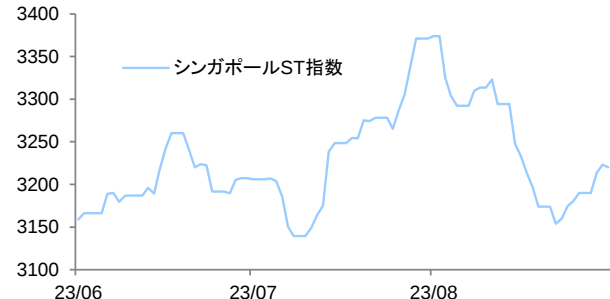
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/4	小売売上高(前年比)	6月	2.1%	1.1%	1.8%
8/11	GDP(前年比)	2Q	0.8%	0.5%	0.7%
8/17	非石油輸出(前年比)	7月	-14.3%	-20.2%	-15.6%
8/23	CPI(前年比)	7月	4.2%	4.1%	4.5%
8/25	鉱工業生産(前年比)	7月	-3.8%	-0.9%	-6.6%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 34.50 ~ 35.60
THB/JPY 4.05 ~ 4.20

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 末廣 純太

■ 先月の為替相場

8月のドルバーツは上昇。月初、1日がタイ休日となる中、34バーツ台前半で取引を開始。2日、タイ中銀による金融政策決定会合にて市場予想通り25bpの利上げが決定され、声明文の追加利上げに係る記述に変化が確認されたものの、為替相場への影響は限定的に。寧ろ、一部格付会社により米国の格付が引き下げられたことでセンチメントが悪化したことや、米7月ADP雇用統計が強い結果であったこと、3日に予定されていたタイ首相指名投票が延期されたことにより同国の政治的行き詰まりが意識されたこと等からドルバーツは底堅い推移を見せ、34バーツ半ば付近まで上昇。その後、7日のタイ7月CPIが下振れたことによる同国追加利上げ期待の剥落や、8日の中国貿易統計の弱い結果を受けたアジア通貨安等を背景に上昇を続け、35バーツ台前半を付けると、その後はしばらく同水準で横這い推移となった。

中旬、15日に中国人民銀行(PBOC)が予想に反し中期貸出制度(MLF)1年物金利の0.15%引き下げを発表。同日発表された米7月小売売上高が市場予想を大幅に上回る結果であったことも相俟って、ドルバーツの上昇は加速。16日(バンコク時間17日早朝)に公表されたFOMC議事要旨も上昇をサポートする内容であったことから、17日には35バーツ半ばと月間高値を付けた。ただ、その後「中国当局が国有銀行に介入強化を指示」とのヘッドラインが確認されると、ドルバーツは下落に転じることとなった。

終盤、22日に実施されたタイ首相指名投票にてタイ貢献党のセタ氏が新首相に選ばれ、同国政治の先行き不透明感が一部払拭されたとの見方から、バーツ高が進行。一時35バーツを割り込み、23日、米経済指標が軟調な結果であることが確認された場面ではさらに下押しされる展開となった。ただ、25日、タイ商務省から発表された同国7月貿易統計では、輸出の減速、貿易収支の赤字幅拡大が確認され、バーツ売り優勢の地合いとなると、ドルバーツは35バーツ台前半まで上昇。注目されたジャクソンホール会議におけるパウエル議長の講演は波乱なく通過し、本欄執筆時点のバンコク時間30日16時時点においても同レベルで推移している。

■ 今月の見通し

今月のドルバーツ相場は底堅い推移を想定。

5月14日に実施されたタイ下院総選挙の開票から約3カ月が経過したところでようやく新首相が選出された。投票率が約75%と歴史的な高水準を記録した同選挙であるが、第1党となった前進党は政権の枠組みから外され、第2党となったタイ貢献党が旧与党(親軍派)と連立を組むことで政権を発足させる見通しとなり、民意を反映したとは言い難い結果となった。ただ、足もとでは大規模なデモ等が発生するような兆候は見られていない。また、開票から新首相選出までの相場の動向を見ると、前進党党首ビタ氏のメディア株保有問題等について判断が憲法裁判所に委ねられたとのヘッドラインが確認された場面や、新首相決定前後のタイミングではバーツ相場に動きは見られたものの、それ以外では驚くほどに相場が動意づく場面は見られなかった。これらに鑑みれば、新首相が選出された中、今後、同テーマで相場が大きく振られる公算は小さいと考えている。

ただ、気がかりなのはタイ経済の動向である。8月21日に発表された同国第2四半期GDPは前年比で+1.8%と、市場予想(同+3.0%)を大きく下回る結果となった。家計消費は堅調で外国人観光客回復に伴うサービス輸出も拡大を見せる中、輸出の低迷が足を引っ張る格好となっている。かかる中、足もと、中国をはじめ世界経済を巡る不透明感が一段と増す中、引き続きタイの輸出の軟調な推移は続くと考えられよう。また、インドでは直近7月のCPIが野菜や穀物等の高騰を要因とし反転上昇を見せ、1年3か月ぶりの高水準を記録したが、タイでも異常気象を背景に農業生産への悪影響が見られている。今後、食料品等の物価上昇に家計が圧迫される展開や、高止まりする金利が個人消費の足かせとなる展開も想定し得るところ。また、外国人観光客の動向についても頼みの綱である中国人観光客が伸び悩みを見せており、今後の一段の回復は予断を許さない。

以上からタイ経済の先行き是不透明感が大きいと見ており、足もとではバーツが大きく上昇する展開は想定していない。ドルバーツが下落する場面があったとしても下値は限定的で、基本的には底堅い推移となると考えている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の食事・レストラン事情』

当地で食事をしていると、習慣等、日本との違いを色々発見することができる。今回はその中から2つご紹介したい。

●ビール

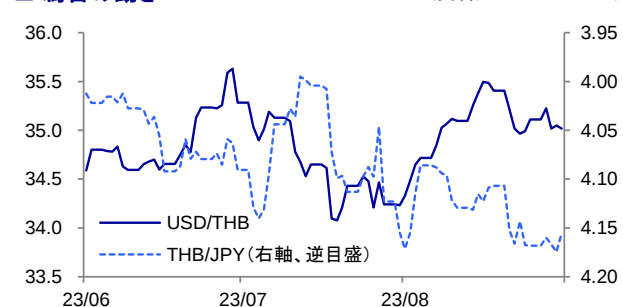
当地ではビールに氷を入れて飲むことが定番となっている。冷蔵庫が普及していなかった時代の名残だとか、背景は色々あるようだが、日本人であれば最初は誰もが戸惑う“ビールに氷”。しかしながら、人間とは不思議なもので当地にしばらくいると慣れてくる。むしろ、ビールに氷がないことに物足りなさを感じるようになってくる。皆様もタイを旅行される際にはぜひ“タイスタイル”でビールを味わって頂きたい。ちなみに私が当地に赴任して最初に覚えたタイ語の単語は「ナムケン(氷)」である。

●タイ米

タイ米(インディカ米)は日本米(ジャポニカ米)と比べると粒が細長く、粘り気が少ない。そして独特の匂いがあり、最初は気になるかもしれない。しかしながら、人間とは不思議なもので当地にしばらくいると慣れてくる。むしろ、ガバオライスやカオマンガイといったタイ料理はタイ米あつての美味しさなんだな、と気づいてしまうのだ。また、日本米と比べると、タイ米はGI値が圧倒的に低いと言われている。ただ、カロリーは日本米より高いため、「タイ米だから多少はいいか」とタイ料理を食べ過ぎてしまわないように注意する必要がある。

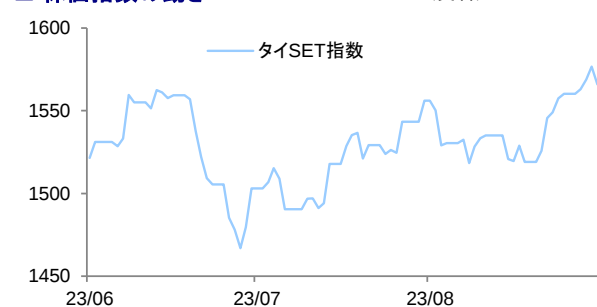
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/2	タイ中銀政策金利	-	2.25%	2.25%	2.00%
8/7	CPI YoY	7月	0.60%	0.38%	0.23%
8/7	CPI コア YoY	7月	0.90%	0.86%	1.32%
8/11	消費者信頼感指数	7月	-	50.3	51.2
8/21	GDP YoY	2Q	3.0%	1.8%	2.6%
8/24	自動車販売台数	7月	-	58,419	64,440
8/25	輸出(通関ベース)YoY	7月	-2.80%	-6.20%	-6.39%
8/25	輸入(通関ベース)YoY	7月	-8.75%	-11.10%	-10.26%
8/25	貿易収支(通関ベース)	7月	-\$1,386M	-\$1,978M	\$58M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.58	～	4.68
	MYR/JPY	31.05	～	32.05
	JPY/MYR	3.12	～	3.22

マレーシアみずほ銀行 内田 壘

■ 先月の為替相場

先月のリングgit相場はドル金利上昇を材料に軟調に推移。月初4.50台後半で取引開始したUSD/MYRは4.6台半ばまで大幅に上昇した。

上旬は、大手格付会社による米国ソブリン格付け引き下げを受けた米国債売りが結果的にドル金利上昇の流れとなりドル高リングgit安。また、米ADP雇用統計で雇用者数増加が発表されるとドル金利高の長期化観測をサポートする結果。サウジアラビアとロシアが9月までの減産合意報道で原油価格は85ドル台半ばまで上昇したが、リングgitへの影響は限定的。8日には中国7月輸出が予想以上に低下した他、6月鉱工業生産がマイナスに転じたことからリングgit安の流れは止まらず4.6突破を目指す展開となった。

中旬は、10日発表の米7月CPIでコアインフレ率が依然高止まりしたことを材料に米債利回りが上昇しリングgit安進展。更に中国不動産大手碧桂園の社債利払い延期報道を契機としたリスク回避の動きも加わった他、州議会選挙で連立与党の苦戦が伝わる中、USD/MYRは心理的節目の4.6をあっさり突破。アジア通貨の中でも相対的なリングgit安が目立つ展開となり4.64台へ上昇。中国では小売売上高、鉱工業生産など経済指標の悪化も続いており失業率も上昇する中、中国人民銀行が3カ月ぶり2度目の利下げを実施。17日夕刻に中国国営銀行による介入強化報道を受けて人民元は一時的に買い戻されたものの、リングgit買戻しは続かなかった。

下旬にかけては、25日のジャクソンホール会議を控えて市場は警戒を強めた為か積極的な売買は控えられ小幅なレンジでの取引。米8月PMIやユーロ圏PMIの下振れを材料としたドル及びユーロ売りフローは一部に留まった。金曜NY時間朝方のジャクソンホールでのパウエル議長講演ではインフレ抑制に向けた断固たる姿勢を改めて明確にしたものの、市場で注目されていた中立金利の引き上げ可能性については明確な言及を回避したことから、特段サプライズとはならず講演後の市場反応も限定的。25日に発表された7月消費者物価指数は前年同月比ベースでヘッドライン+2.0%、コア+2.8%となり、両数値共に物価上昇鈍化を確認する内容。リングgit買戻しの材料が乏しい中、やや一時的なリングgit安となった。

■ 今月の見通し

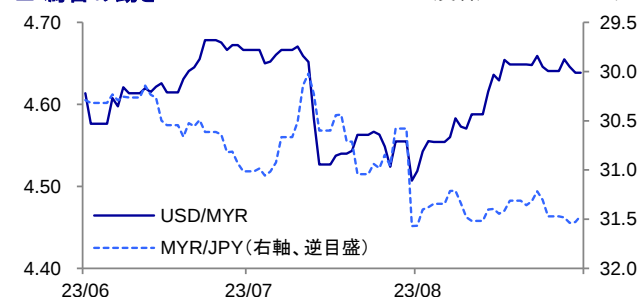
今月のリングgit相場は、市場が注目していたジャクソンホール会議が無難に通過して、パウエル議長が中立金利引き上げに関して特段言及がなかった点を考慮すると、リングgit買戻しの機会を探る展開と見ている。逆にUSD/MYRの現行水準を一段上抜けて4.7台を突破する為には、新たなドル高材料乃至はリングgit安材料が必要となろう。

国内の注目イベントは9/7マレーシア中銀の金融政策会合。同中銀が政策金利の判断を行う上での重要な判断材料の一つは直近8/25に発表された7月消費者物価指数。7月データは国内物価の落ち着きが確認される内容。引き続き堅調な民間消費が国内経済を下支えするというのが前回7月金融政策会合での中銀認識であったが、6月以降貿易統計が大幅な減速を示している他、貿易主要相手国である中国経済が不動産大手の経営不振等、回復の兆しが見えない。こうした状況下、既に政策金利がコロナ前の水準まで戻していることも踏まえ、市場参加者は更なる利上げに動く可能性は低いとの見方がコンセンサスとなっており、金利面で見たリングgit高をサポートする材料は現時点で見出しづらい。また、先月実施された州議会選挙ではアンワル首相率いる連立与党が勝利を収めた一方、議席数を落とす辛勝に終わっていて、お世辞にも政権安泰とは言える状況ではない。

海外に目を向けると、ジャクソンホール会議ではパウエル議長がややタカ派寄りスタンスを示したと解釈されている一方、注目されていた中立金利に関する言及がなかった点を踏まえると、ドル金利の上昇余地は限定的と見ており、今月以降、リングgit反転の機会を探る展開になると予想する。

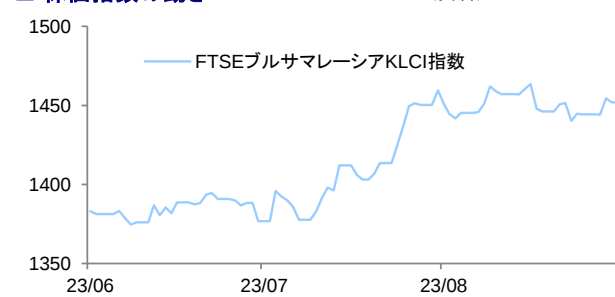
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/7	Foreign Reserves	Jul 31		\$112.9b	\$111.8b
8/8	Industrial Production yoy	Jun	-1.0%	-2.2%	4.7%
8/18	GDP yoy	2Q	3.3%	2.9%	5.6%
8/18	BoP Current Account Balance	2Q	3.3b	9.1b	4.3b
8/18	Exports yoy	Jul	-11.1%	-13.1%	-14.1%
8/18	Imports yoy	Jul	-15.4%	-15.9%	-18.9%
8/18	Trade Balance MYR	Jul	21.20B	17.09B	25.81B
8/22	Foreign Reserves	Aug15		\$112.2b	\$112.9b
8/25	CPI yoy	Jul	2.1%	2.0%	2.4%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 15100 ~ 15800
 IDR/JPY 0.9174 ~ 0.9709
 JPY/IDR 103.00 ~ 109.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 網島 正侑記

■ 先月の為替相場

8月のルピアは下落。

月初1日、ドルルピアは15100近辺で取引を開始。この日、発表されたインドネシアの7月CPIの結果は前年比+3.08%となり、引き続きインドネシア中銀の定める目標レンジ(2~4%)内に収まった。事前予想を小幅に下回る結果ではあったものの市場の反応は限定的となった。海外時間、米国債の格下げとの報道を受けリスク回避的な値動きとなる中、翌2日にはルピアは対ドルで下落し15100台後半を付け3日にかけては15200近辺まで下落幅を拡大させた。4日、海外時間に発表された米7月の雇用統計の結果は、非農業部門雇用者数変化指数は予想を下回ったが、平均時給は予想を上回る伸びを見せ、米7月失業率も予想より低下し、強弱まちまちな内容。週明け7日、ドルルピアは前週末引けとほぼ同水準となる15100台半ばで取引を開始。発表された第二四半期GDPは前年同期比+5.17%の伸びとなり、過去3四半期で最大となったが市場の反応は限定的。8日に発表された中国の輸出が市場予想を下回る結果となったことを受けリスク回避的な値動きとなる中、ルピアは軟調に推移し15200台前半まで下落。10日海外時間に発表された米CPIの結果は事前の市場予想とほぼ同水準となり反応は限定的。翌11日アジア時間のドルルピアは15200近辺で推移したが、海外時間に入り発表された米7月コアPPI(前年比)の結果が事前の市場予想を上回る結果となったことを受け米インフレが予想程減速していないとの思惑からドル買いが優勢となると、翌週14日アジア時間には15300台前半までルピア安が進展。翌15日にかけて15300台半ばまで下落幅を拡大させ月中旬安値を付けた。16日はドル高の流れも一服する中、15200台後半までルピアは反発したがその後も15300を中心とした狭いレンジ内でもみ合う展開が継続。22日に発表されたQ2経常収支は2年ぶりの赤字となったが市場の反応は限定的。23日、アジア時間引けにかけ米金利上昇が一服したことを受けドルが売られ、ルピアは15200台後半まで上昇。海外時間に入り発表された米PMI指数が市場予想を下回る結果となると、米金利低下、ドル売りの流れとなり、翌24日アジア時間にはルピアは15200台半ばまで上昇。この日インドネシア中銀定例会合では政策金利の据え置きが決定されたが、事前の市場予想通りの結果となり市場の反応は限定的となった。先週25日海外時間に行われたジャクソンホールでのパウエルFRB議長講演は概ね市場の予想の範囲内であり、新たな手掛かりはなく週明け28日のドルルピアは前週末クローズとほぼ同水準となる15200台後半で取引を開始。

■ 今月の見通し

9月のルピアは軟調な値動きを予想。

インドネシアのインフレ率は年初時点の中銀予想を上回るペースで低下しており、インフレ誘導目標レンジである2%~4%の中心3%程度まで低下。インドネシア中銀としてはインフレ抑制から国内景気へのテコ入れに焦点が移りつつあるものと推測する。しかしながら、資源価格の低下等を受け第二四半期経常収支が約2年ぶりに赤字化しており、需給面からルピアが弱含みやすい環境にある中、利下げに動くことは困難か。加えて、引続き米国は年内追加利上げの可能性を残している中で、インドネシアが利下げに踏み切るとなると金融政策の方向感の違いからルピア安となる可能性が懸念されよう。ペリー中銀総裁は8月定例会合後の会見において「為替レートの安定を主眼とする」とコメントしている中、利下げに踏み切る可能性は低い。引続き政策金利は現状水準を維持しつつルピア安圧力が強まる局面では介入により為替レートの調整を行う方針となるものと予想。ただ、介入によってルピア安を完全に抑え込めるとは限らない。昨年、ルピア安が急速に進展した年後半においては為替介入を実施したとされるもののドルルピアは一時15700台までルピア安が進展した経緯もある。上記でも触れた通り、経常収支が赤字化している環境下、需給面からみればルピア売りに傾きやすく引続きルピアは軟調に推移するものと考え。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の食事・レストラン事情』

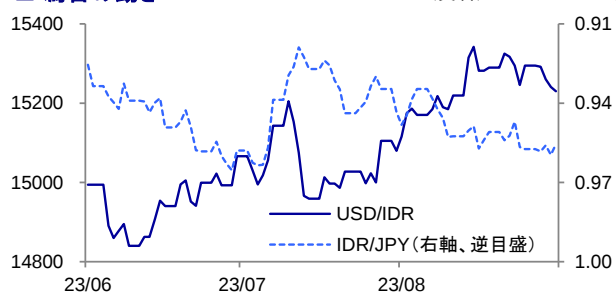
パダンレストランは、おいしくて安価なご飯ベースの食事へのインドネシアの答えです。西スマトラ州の首都にちなんで名付けられたパダン料理は、この地域のいたるところで見られ、また現在、海外でも広まっています。

パダンレストランは、ショーウィンドウに積み上げられた食べ物のボウルを見ればすぐわかります。魅力は料理の種類だけではなく、その提供スタイルにもあります。ショーウィンドウから選択するか、メニューから選択するか、ウェ이터が何も言わずにテーブルに持ってくるかのいずれかです。ウェ이터が持ってくるときはさまざまな種類の料理を載せた多数の小皿として提供されます。お客さんは食べた皿の料金のみを請求されます。

地元の人の多くは、ご飯を手で食べることを好みます。パダン料理はそうように提供されるだけでよりおいしいと言われています。パダンレストランで食事する機会があれば、ぜひ手で食べてみてください。(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	CPI(前年同月比)	7月	3.10%	3.08%	3.52%
8/7	GDP(前年比)	2Q	5.00%	5.17%	5.03%
8/15	貿易収支(USD M)	7月	2,583	1,310	3,460
8/15	輸入(前年比)	7月	-19.20%	-18.03%	-21.18%
8/15	輸入(前年比)	7月	-15.29%	-8.32%	-18.35%
8/24	BI 7daysリバースレボ金利	-	5.75%	5.75%	5.75%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 55.00 ~ 58.00
JPY/PHP 0.38 ~ 0.40

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

大手格付会社による米国の格下げを受けたリスクオフから、アジア通貨は全面安の展開となり、ペソは8月初に1米ドル＝55ペソ台まで下落。その後も米労働市場の底堅さや米国債の発行規模拡大を受けた、米金利上昇からドル堅調となったほか、7月の比消費者物価指数は前年同月比+4.7%と市場予想の+4.9%を下回る伸びとなり、前月の+5.4%から低下となるなど、インフレ鈍化を受けて、8月17日の政策会合での利上げ観測が後退したことがペソ安材料となりペソは8月に言入って以降、連日の大幅安となった。7日には比中銀のレモナ総裁は潜在的なインフレ圧力が残るなか、追加利上げの必要性を認める一方で、経済成長を阻害しないために、過度な金融引き締めに対して否定的な見解を示したことから、ペソは下落ペースを拡大させ、約2か月ぶりに1米ドル＝56ペソ台までペソ安が進んだ。

6月の比貿易統計にて、貿易赤字が5月の44.4億ドルから39.2億ドルに縮小したほか、レモナ総裁は短期間での金融政策転換のリスクを取りたくない、と、早期利下げに対して慎重な姿勢を示した一方、中国経済に対する懸念再燃によるリスクオフや第2四半期の比GDPが前年比4.3%増と市場予想の6.0%増を大幅に下回るなど、脆弱材料が混じるなか、ペソは月半ばにかけてはレンジ推移となった。より長期に渡って、米政策金利が高水準に維持されるとの見方から米金利上昇地合いが続き、ドルを押し上げたほか、原油価格の上昇や比政策金利据え置き観測の高まりから、14日にペソは年初来安値を更新し、一時、昨年11月下旬以来の水準となる1米ドル＝56.990ペソまで下落。17日に大方の予想通り、比中銀は3会合連続で政策金利の据え置きを決定し、レモナ総裁は会合での決定はタカ派的据え置きであり、インフレリスクが顕在化した場合は利上げの用意があるとしたほか、ペソ為替市場について時々介入を実施しており、十分な外貨準備を保有しているとの見解を示したことから、ペソは大幅反発し、中旬は往って来いの展開となった。

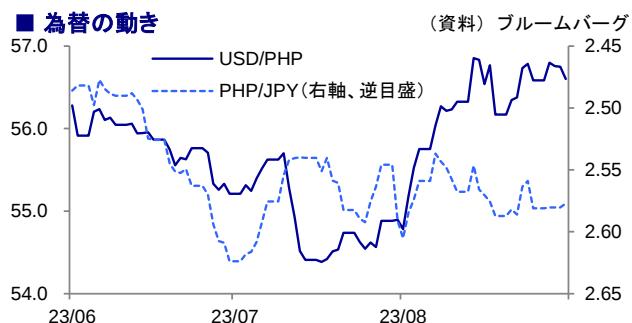
レモナ総裁は当面の選択肢は政策金利引き上げか据え置きかであり、今はまだ利下げを議論する段階ではないと、タカ派姿勢を強調したが、ジョグノ財務相が恐らく年末までは政策金利は据え置かれ、来年第1四半期には利下げが可能とコメントしたことを受けて、ペソは再度、年初来安値付近まで反落するなど8月はアジア通貨のなかでも相対的な弱さが目立った。

■ 今月の見通し

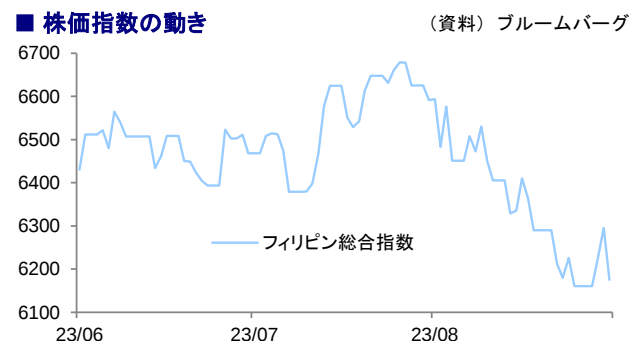
フィリピン中銀はインフレ低下継続と経済成長減速を受けて、8月17日の会合にて政策金利据え置きを決定したが、引き続き、インフレのリスクは上方向にあるとし、今後の更なる利上げ可能性を示唆するなど、タカ派姿勢を強調した。足許は経済指標の軟調な結果を受けた、中国経済に対する懸念再燃が主たる要因となって、ドル高アジア通貨安が進んだが、一時、約9か月ぶりの水準までペソ安が進むなど、米国とフィリピンの政策金利差を要因とした更なるペソ安懸念が燃えるなか、政策金利差を一定程度維持するために、今後の米金融政策動向次第では、インフレ低下が中銀見通し通り進んだとしても、フィリピンも追加利上げを余儀なくされる展開も想定される。利上げは短期的にはペソの一定のサポートとなり得るが、ドル主導の相場展開との見方は変わらずのほか、中長期的な経済活動への影響を鑑みると、ペソサポート効果は限定的で基調としてのペソ安は継続との見方。但し、政策当局者からはペソ安定化の為に介入を実施しているとの発言や、追加利上げの準備のほか当面の利下げに否定的な見解が示されるなど、介入やタカ派スタンス強調から、目先は1米ドル＝57ペソ水準が防衛ラインとなるであろう。需給面に目を向けると、フィリピンの貿易赤字は縮小しているが、今後も内需の底堅さやペソ安の影響から貿易赤字が高水準で継続し、ペソが売られやすい環境が続く可能性が高い。

また、米金融当局はインフレは鈍化も依然ターゲットを上回っており、インフレ圧力が根強い中、今後の追加利上げの選択肢を残しているが、米引き締めは最終局面にあるとの見方は変わらず。一方、インフレ警戒姿勢を堅持する中、市場が早期利下げを織り込み、インフレ期待を再燃させることがないよう、米金融当局による年内利下げといった議論も当面は想定されず、年内は政策金利が現行水準付近で据え置かれる公算が高く、ペソ高にトレンド転換する材料にも乏しいなか、今後もドルは底堅く推移すると予想したい。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
----	----	----	----

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 81.80 ~ 83.20
INR/JPY 1.68 ~ 1.82

アジア・オセアニア資金部 インド室 綿引 修平

■ 先月の為替相場

【8月の米ドル/インドルピーは上下に往って来いの展開】

82台前半水準で当月取引を開始。月初は、FRB高官のタカ派発言や経済指標の良化を背景とした米ドル高地合いに、ルピー安の展開。82.85水準からは、RBIからの為替介入（ドル売りルピー買い）の上値抑えの動きが見られたことで、同水準での横這い推移がしばらく続く。その後、ドル高圧力の継続によるじり安基調となる中、節目の83水準を一部上回って推移する時間帯となった。一方で、RBIからの再びの為替介入や実需勢のインフロー（インドルピー買い）も相俟って、月末にかけて水準感を大きく取り戻す動きに転じ、結局82.65近辺でのクローズとなった（25日時点）。

SENSEXは、月初66,000水準を超える水準まで上昇後、調整圧力が再燃し、値を下げる展開。MPCでの政策金利据え置きの結果に、再度値を下げる局面も散見され、月末にかけての利益確定売りの流れもあって、節目の65,000水準を下回ってのクローズとなった。一方、過度な売り込みによるダイレクションの変化とは至っておらず、下値の底堅さは引き続き残存している状況。

インド経済指標では、月初に発表された7月製造業・サービス業PMIは、強弱ミックスの結果に。注目された8月MPCは、3会合連続となる政策金利据え置き（6.50%）を実施。一方、政策スタンス（インフレ退治に向けた利上げ路線継続）は、不変のままとした。7月消費者物価指数（CPI、前年比）は、+7.44%とRBIのインフレターゲットの上限である+6%を超える水準まで上昇。7月貿易収支は引き続き赤字が継続し、通貨として売られやすい立ち位置は変わらずとなった。

■ 今月の見通し

【9月の米ドル/インドルピーは節目83水準での上値攻防か】

9月においては、節目83水準を上限とした上値攻防の展開を見込む。8月には、節目である83水準を若干上回る水準での値動きも散見されたが、引き続きRBIからの為替介入による上値抑えのアンダーコントロールは続いている状況。斯かる中、引き続き目線感としての節目83水準での上値攻防を想定しておきたい。目先はインド中銀含めて同水準が心地良いのかもしれないが、83水準を超えた値動きが長期化する場合については、上値目線の切り上げも視野に入れておきたい。

8月のMPCでは、3会合連続での政策金利据え置きとなったものの、23/24年度のCPI見通しは、+5.4%と前回6月会合時の+5.1%から見通しを引上げしている状況。加えて、7月CPIは、昨今の天候不順による食料価格の高騰もあり、インフレターゲットの上限を超える水準まで上昇。総裁会見でのインフレ動向次第で更なる利上げを検討することも示唆している中で、次回10月会合にて、再度の利上げ路線に転換する可能性が高まりつつあるのではないかと。

中長期的には、米国利上げの終点（来年央から後半を想定）に伴う、ドル安/新興国通貨高（インドルピー高）の圧力の顕在化が訪れる想定であるが、下値におけるインド中銀からの為替介入による下支えおよび実需勢からのアウトフロー（インドルピー売り）から、大きくルピー高が進行するというダイレクションとなるよりは、緩やかなインドルピー安への相場回帰を主軸に考えておきたい。

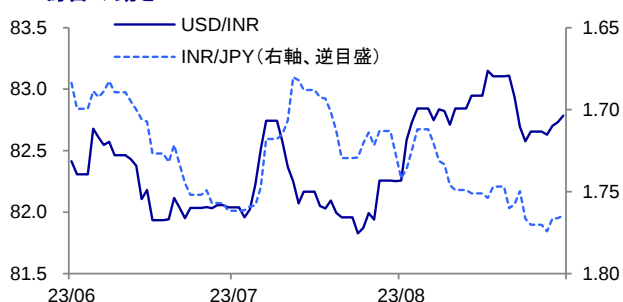
■ 今月のつぶやき（現地からの声）

『当地の食事・レストラン事情』

バンガロールの食事・レストラン事情は、良い。他の地域よりも良いし、レベルも高い方だと感じている。数年前に初めてインドに来た時には、ホテル（インドではレストランをホテルと呼ぶ）の椅子や床の汚さや、ひょいと目をやると見えてしまう裏側に食欲もなくし、ふんだんに使われるスパイスによくお腹も壊したもののだが、ここバンガロールの、特にホテル（宿泊施設の方）のレストランでは時折驚くような味加減の料理が出てくることがある。塩加減が素晴らしく、なるほど「塩梅」とはこういうことかと納得することもある。聞く留学して料理を勉強したというシェフだったりする。ベジタリアンは肉を触れない人もいるが、そこはどうかのかとちらっと考えるが美味しいのでよいのだ。先日頂いたサラダのハニーマスタードドレッシングはしっかりマスタードとの味も絶品だったし、思わず購入を申し込んでホテルスタッフを困らせる程クロワッサンはパリパリで香ばしかったのだから。個人でパイや料理を提供するビジネスをしている人もいて、バンガロール限定かもしれないが居住している外国人にとって、この変化と発展は胃に助かる話であり目を見張る魅力のある点でもある。変化激しいインドにおいては食も速いスピードで変化していくのだなあと、露店でパニプリ*を頬張ったりしている。*プリという油で揚げた玉の中にポテトサラダの様な物を詰め込み、ちょっと酸っぱいスパイスの液体（パニ）を中に注いで食べるストリートスナック（バンガロール支店 近藤）

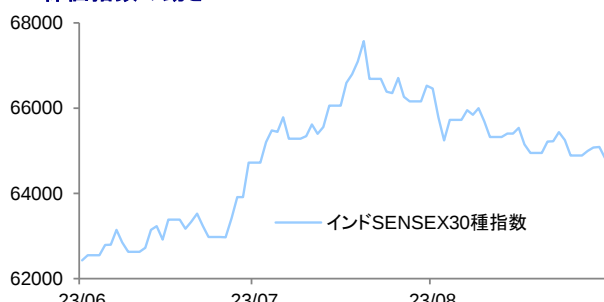
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーク



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーク

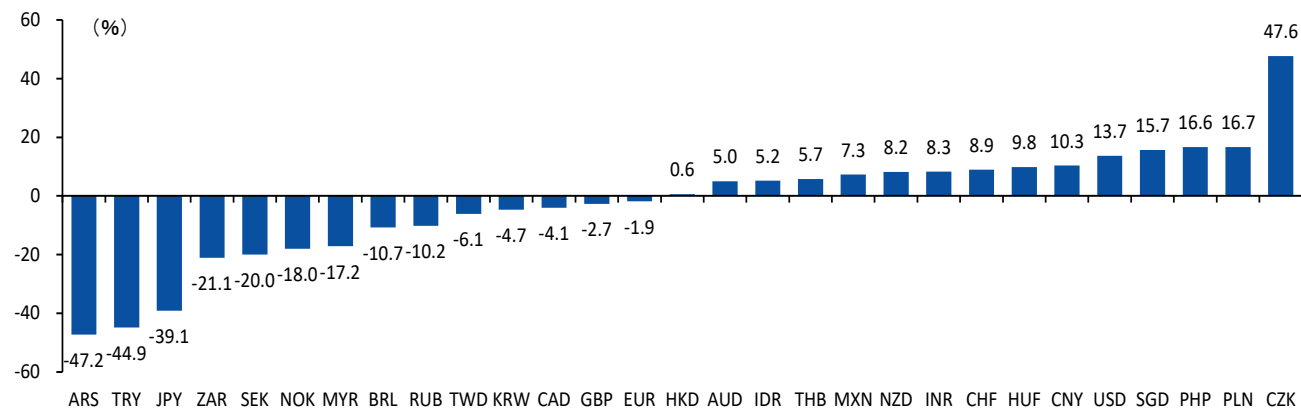
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	製造業PMI	7月	-	57.7	57.8
8/3	サービス業PMI	7月	-	62.3	58.5
8/10	政策金利	8月	6.50%	6.50%	6.50%
8/11	鉱工業生産	6月	5.00%	3.70%	5.30%
8/14	CPI	7月	6.50%	7.44%	4.81%
8/14	貿易収支	7月	-20,950	-20,670	-20,130

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2022年末	2023年8月末	騰落率	株式市場	2022年末	2023年8月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	33147.25	34721.91	4.8%	-
日本	USD/JPY	131.12	145.54	11.0%	日経平均株価	26094.5	32619.34	25.0%	12.6%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0705	1.0843	1.3%	ドイツDAX指数	13923.59	15947.08	14.5%	14.5%
英国	GBP/USD	1.2083	1.2673	4.9%	ロンドンFTSE 100指数	7451.74	7439.13	-0.2%	-4.8%
豪州	AUD/USD	0.6813	0.6484	-4.8%	S&P/ASX200指数	7038.688	7305.269	3.8%	9.1%
カナダ	USD/CAD	1.3554	1.3508	-0.3%	S&PTロント総合指数	19384.92	20292.62	4.7%	5.0%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.8986	7.2589	5.2%	上海総合	3089.258	3119.876	1.0%	-4.0%
香港	USD/HKD	7.8016	7.8418	0.5%	香港ハンセン	19781.41	18382.06	-7.1%	-7.6%
インド	USD/INR	82.735	82.785	0.1%	インドSENSEX30種	60840.74	64831.41	6.6%	6.5%
インドネシア	USD/IDR	15573	15230	-2.2%	ジャカルタ総合	6850.619	6953.26	1.5%	3.8%
韓国	USD/KRW	1260.33	1322.89	5.0%	韓国総合株価	2236.4	2556.27	14.3%	8.9%
マレーシア	USD/MYR	4.4045	4.6385	5.3%	ブルサマレーシアKLCI	1495.49	1451.94	-2.9%	-7.8%
フィリピン	USD/PHP	55.741	56.602	1.5%	フィリピン総合	6566.39	6175.25	-6.0%	-7.4%
シンガポール	USD/SGD	1.3395	1.3512	0.9%	シンガポールST	3251.32	3233.3	-0.6%	-1.4%
台湾	USD/TWD	30.73	31.88	3.7%	台湾加権	14137.69	16634.51	17.7%	13.4%
タイ	USD/THB	34.608	35.018	1.2%	タイSET	1668.66	1565.94	-6.2%	-7.3%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2023年7月時点)



■ 実質GDP成長率

	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2021	2022
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	7.0	-1.6	-0.6	3.2	2.6	2.0	2.1	5.9	2.1
日本*	4.5	-2.1	5.1	-1.2	0.2	3.7	6.0	2.4	1.1
ユーロ圏	4.8	5.4	4.2	2.4	1.7	1.1	0.6	5.5	3.4
英国	8.9	10.6	3.8	2.0	0.6	0.2	0.4	7.6	4.1
豪州	4.6	3.1	3.1	6.0	2.6	2.3		5.3	3.7
カナダ*	6.9	2.6	3.6	2.3	-0.1	3.1		5.2	3.5
エマージングアジア									
中国	4.3	4.8	0.4	3.9	2.9	4.5	6.3	8.4	3.0
香港	4.7	-3.9	-1.2	-4.6	-4.1	2.9	1.5	6.4	-3.5
インド	5.2	4.0	13.1	6.2	4.5	6.1	7.8	6.5	9.1
インドネシア	5.0	5.0	5.5	5.7	5.0	5.0	5.2	3.7	5.3
韓国	4.3	3.1	2.9	3.2	1.4	0.9	0.9	4.3	2.6
マレーシア	3.6	4.8	8.8	14.1	7.1	5.6	2.9	3.1	8.7
フィリピン	7.9	8.0	7.5	7.7	7.1	6.4	4.3	5.7	7.6
シンガポール	6.6	4.0	4.5	4.0	2.1	0.4	0.5	9.1	3.7
台湾	5.2	3.9	3.0	3.6	-0.8	-3.3	1.4	6.5	2.4
タイ	1.9	2.2	2.5	4.6	1.4	2.6	1.8	1.5	2.6

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

■ 失業率

	22/12	23/01	23/02	23/03	23/04	23/05	23/06	23/07	2021	2022
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.5	3.4	3.6	3.5	3.4	3.7	3.6	3.5	5.4	3.6
日本	2.5	2.4	2.6	2.8	2.6	2.6	2.5	2.7	2.8	2.6
ユーロ圏	6.7	6.7	6.6	6.5	6.4	6.4	6.4		7.7	6.7
英国	3.7	3.7	3.8	3.9	3.8	4.0	4.2		4.6	3.7
豪州	3.5	3.7	3.6	3.5	3.7	3.6	3.5	3.7	5.1	3.7
カナダ	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.2	5.4	5.5	7.5	5.3
エマージングアジア										
中国									3.9	
香港	3.5	3.4	3.3	3.1	3.0	3.0	2.9	2.8	5.4	4.3
インドネシア			5.5						6.4	5.9
韓国	3.1	2.9	2.6	2.7	2.6	2.5	2.6	2.8	3.6	2.9
マレーシア	3.6	3.6	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4		4.6	3.8
フィリピン	4.3	4.8	4.8	4.7	4.5	4.3	4.5		7.8	5.4
シンガポール	2	1.9	1.9	1.8	1.8	1.9	1.9		2.7	2.1
台湾	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.5	3.5	3.4	4.0	3.7
タイ	1.2			1.1			1.1			

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	22/11	22/12	23/01	23/02	23/03	23/04	23/05	23/06	23/07	2021	2022
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	7.1	6.5	6.4	6.0	5.0	4.9	4.0	3.0	3.2	4.7	8.0
日本	3.8	4.0	4.3	3.3	3.2	3.5	3.2	3.3	3.3	-0.3	2.5
ユーロ圏	10.1	9.2	8.6	8.5	6.9	7.0	6.1	5.5	5.3	2.6	8.4
英国	10.7	10.5	10.1	10.4	10.1	8.7	8.7	7.9	6.8	2.7	9.1
豪州		7.8			7.0			6.0		2.9	6.6
カナダ	6.8	6.3	6.3	5.9	5.2	4.3	4.4	3.4	2.8	3.4	6.8
エマージングアジア											
中国	1.6	1.8	2.1	1.0	0.7	0.1	0.2	0.0	-0.3	0.9	2.0
香港	1.8	2.0	2.4	1.7	1.7	2.1	2.0	1.9	1.8	1.6	1.9
インド	5.9	5.7	6.5	6.4	5.7	4.7	4.3	4.9	7.4	5.1	6.7
インドネシア	5.4	5.5	5.3	5.5	5.0	4.3	4.0	3.5	3.1	1.6	4.2
韓国	5.0	5.0	5.2	4.8	4.2	3.7	3.3	2.7	2.3	2.5	5.1
マレーシア	4.0	3.8	3.7	3.7	3.4	3.3	2.8	2.4	2.0	2.5	3.4
フィリピン	8.0	8.1	8.7	8.6	7.6	6.6	6.1	5.4	4.7	3.9	5.8
シンガポール	6.7	6.5	6.6	6.3	5.5	5.7	5.1	4.5	4.1	2.3	6.1
台湾	2.4	2.7	3.1	2.4	2.4	2.4	2.0	1.8	1.9	2.0	3.0
タイ	5.6	5.9	5.0	3.8	2.8	2.7	0.5	0.2	0.4	1.2	6.1

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2021	2022
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.4	-3.8	-3.9	-3.8	-3.7	-3.4		-3.6	-3.8
日本	3.9	3.7	3.1	2.4	2.1	1.7	2.2	3.9	2.1
ユーロ圏	2.3	1.6	0.6	-0.7	-0.7	-0.2		2.3	-0.7
英国	-1.5	-3.2	-4.2	-3.8	-3.8	-2.1		-1.5	
豪州	3.0	2.3	2.0	0.9	1.1	1.4		3.0	1.1
カナダ	-0.3	-0.1	0.2	-0.1	-0.3	-0.7		-0.3	-0.3
エマージングアジア									
中国	2.0	2.0	2.1	2.4	2.4	2.2	2.2	2.0	2.2
香港	11.8	12.6	10.9	11.6	10.5	8.9		11.8	10.5
インド	-1.1	-1.2	-1.9	-2.6	-2.4	-2.0		-1.1	-2.4
インドネシア	0.3	0.4	0.9	0.8	1.0	1.1	0.7	0.3	1.0
韓国	4.9	4.6	4.1	2.9	1.9	0.6		4.7	1.8
マレーシア	3.5	2.8	2.1	2.1	2.7	2.8	3.0	3.5	2.7
フィリピン	-1.8	-2.8	-4.6	-5.9	-4.6	-4.4		-1.8	-4.4
シンガポール	18.0	19.8	20.1	20.3	19.3	18.5	18.1	18.0	19.3
台湾	15.2	15.6	14.8	14.2	13.4	12.1	11.9	15.2	13.4
タイ	-2.1	-2.2	-3.2	-4.0	-3.5	-2.4		-2.1	

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	5.25-5.50	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2023/7/26	+25bp	2023/7/26	+25bp
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和: 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2023/7/28	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	3.75	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2023/7/27	+25bp	2023/7/27	+25bp
英国	バンク・レート	5.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2023/8/3	+25bp	2023/8/3	+25bp
豪州	キャッシュ・レート	4.10	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/6/6	+25bp	2023/8/1	現状維持
カナダ	翌日物金利	5.00	引き締め: 2022/3/2	0.25	2023/7/12	+25bp	2023/7/12	+25bp
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.45	緩和: 2012/6/8	6.31	2023/8/21	-10bp	2023/8/21	-10bp
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/2/8	+25bp	2023/8/10	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	5.75	引き締め: 2022/8/23	3.50	2023/1/19	+25bp	2023/8/24	現状維持
韓国	7日物レポ金利	3.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2023/1/13	+25bp	2023/8/24	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	引き締め: 2022/5/11	1.75	2023/5/3	+25bp	2023/7/6	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.25	引き締め: 2022/5/19	2.00	2023/3/23	+25bp	2023/8/17	現状維持
台湾	再割引金利(公定歩合)	1.875	引き締め: 2022/3/17	1.125	2023/3/23	+12.5bp	2023/6/15	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	2.25	引き締め: 2022/8/10	0.50	2023/8/2	+25bp	2023/8/2	+25bp
ベトナム	リファイナンス金利	5.00	緩和: 2023/3/31	6.00	2023/5/23	-50bp	2023/5/23	-50bp

(注)インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBILレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行